

包括的博物館 — 21 世紀の博物館像 —

糸魚川 淳二

〒 509-6251 瑞浪市日吉町 5125-4

Comprehensive Museum — An Image of the Museum in the 21st Century —

Junji Itoigawa

Hiyoshi-cho, Mizunami 509-6251, Japan

Abstract

For the purpose to establish a new concept of the museum at present and in future, an idea of the comprehensive museum is proposed.

Firstly, considering the present circumstances of museums in Japan, following problems are discussed.

1. key words of museums at present in Japan
2. classification of museums
3. historical review of museology in Japan
4. 「Law of museum」 and museum world in Japan
5. “gakugei-in”(so-called curator in Japan) and their works such as collecting and research
6. comprehensive exhibition
7. management of museums
8. museums and community
9. ecomuseum and “ecomuseum”
10. university museum and visitor center

Examining the above items, 11. comprehensive museum is imaged as follows;

1. The concept of the comprehensive museum primarily suggested by the comprehensive exhibition.
2. The comprehensive museum holds original museum activities such as collecting, research, exhibition and workshop etc.
3. Activities are closely related each other, and their relations are comprehensive and three dimensional network.
4. Cooperation between museum staffs and citizens is important.
5. The comprehensive museum has network systems with other museums, community and other organizations such as school, university and NPO group.
6. Ecomuseum or “ecomuseum” is one of the comprehensive museum.
7. Relationship between nature and culture is the main item of the comprehensive museum.

Key words: museum, comprehensive museum, museum activity, comprehensive exhibition, “ecomuseum”, museology

はじめに

博物館にかかわるようになってから 37 年、いろいろな、多くの経験をした。4 冊の本、多くの論文を書き、2009 年の瑞浪市石博物館研究報告 no. 35 のサプリメントとして、特集「博物館—現在と未来—」を多くの協力者を得てまとめた。

こうした博物館活動の総括として、2009 年の論文集を超えて、現状の認識・解析から 21 世紀の理想的博物館像として、「包括的博物館」の考えを提起した。これまでの成果を基盤として新知見を加え、これからの博物館のあり方を展望し、進路に光を当てようとするものである。最近の論述と重なる部分もあるが、引用として示してあるので、参照して頂きたい。

本稿をまとめるにあたり、これまでの博物館研究・実践にあたっ

て協力された多くの方々・博物館がある。いちいちお名前を挙げないが心から感謝する。中でも、倉田公裕氏からは多くの示唆を頂いた。厚くお礼申し上げる。

1. 博物館のキーワード

1) 博物館の現在

糸魚川 (2009a) は自然史博物館を中心に、2008 年での博物館についての状況を分析してまとめている。1 年後の現在、それほど大きな変化はないと思われるが、そのデータを基本として、少し視点も変えて、現在的な問題を取り上げてみる。

(1) 基本的なこと

博物館数・館種・入館者数について、2007 年度についてみると (日博協, 2009b, c), 2006 年度 (糸魚川, 2009a) と比べて

大きい変化はない。すなわち、総館数は4062館で、わずかであるが増える。ただこれは追加館が多かったためで、実際には新開館が12館、閉館が36館で減少していることになる。館種についてみると、総合館4.0%（2006年度：4.0、以下同じ）、歴史館45.3%（45.2）、郷土館13.2%（13.1）、美術館22.2%（22.1）、生物館園6.5%（6.6）、理工館4.4%（4.5）、自然史館4.4%（4.5）となり、ほとんど変化はない。入館者数は177,688,832人で、2006年度と比べ3000万人近く増加している。1館あたりの人数は75,806人で、前年（68,261人）と比べ、7500人以上増加している。館数は増加していないのに入館者数が増加しているのは、いろいろな理由があると思われるが、不況下でのレジャーに安・近・短を求めて、博物館などを選択したこと、後で述べるような全体的な博物館界の活性化に関係があるのかもしれない。

（2）社会的背景と博物館

一言で言えば現在は変化の激しい、きびしい時代である。「豊かさ」の時代といわれ、例えばレジャーが多様化し、何でもありの世の中ではあるが、一方において大きな世界的経済危機が起り、日本においても例外ではない。国・地方に限らず財政危機は大きな問題で、私たちの生活にも大きな影響を与えている。博物館についても同様で、さまざまな問題が生まれ、各館はそれぞれへの対応に追われていると言ってよいだろう。

それは行政改革の名の下での、博物館の存廃・統合の問題、予算・人員の削減、指定管理者制度の導入などである。具体的にみると、東京都における東京都近代文学博物館・東京都高尾自然科学博物館の閉鎖など、乱暴とも思われる橋下大阪府知事の「大阪維新プログラム案」による文化施設切捨て計画がその典型である。埼玉県「県立博物館施設再編整備計画」による歴史系・自然系の統合、岐阜県「県ミュージアムひだ」の休館などもある。指定管理者制度の博物館への適用も大きな変革で、多くの問題を含んでいるが博物館の運営に関することとして後述する。

日本の教育予算は世界的に見て、先進国としては最低水準であると言われる。OECD加盟28カ国のうち、教育機関への支出がGDPに占める割合を見ると日本は最下位で3.4%であるというデータがある。しかもその大部分は学校教育に当てられるもので、博物館などの生涯学習（社会教育）に及ぶものはわずかである。教育、特に博物館を含む生涯学習に関して、日本は世界の先進国とは決していえない状態にある。

（3）美術館

今世紀の初め、財政的事情によるいくつかの私立美術館の閉鎖や資料（美術品）の売却、公立美術館の収予算の削減などにより元気のなかった美術館界も、その後東京六本木に国立新美術館・サントリー美術館・森美術館が開館して話題を呼んだ。さらに、各地に新しいコンセプトによる、これまでと違った形をもった美術館が生まれ、マスコミの話題となり、多くの新しい来館者を迎えることとなった。

そのひとつの典型は金沢21世紀美術館である（図1）。この館についての詳細は蓑（2007）に詳しいが、確かにこれまでの美術館のイメージと異なっている。コンセプト・建物の構造・展示物とその見せ方・人の集め方など、新しいやり方が見られ、若い人を中心に、美術を鑑賞するというよりも楽しむという立場での利用がなされている。

同様に、香川県直島の地中美術館、青森県立美術館、十和田市



図1. 金沢21世紀美術館。

Fig. 1. 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa.

現代美術館なども、それぞれ内容に違いはあるが同様の方向を目指すものである。何を集めるか・見せるか、どんなことを体験させるか、いかに気持ちをリラックスさせるか、などが求められている。そして、気安く訪れて、非日常の意外性を体験できるような、緩やかなフリースペースを用意することがポイントであろう。その他、新しい美術館も各地につくられていて、博物館の20%以上を占めているのだが、一般的に美術館はきびしい財政状況に基づく運営の見直しを迫られ、集客に懸命な努力をしていると言える。

しかし、一方において、日本では国立新美術館・名古屋ボストン美術館などに代表される資料をもたない美術館が生まれるような状況下にある。これは日本の美術館の基本的な問題、資料の質・量に関係することであろう。そして、このことは他から借用した優れた資料を展示して人を集める巡回展という形につながっている。新しく美術館をつくっても、資料の蓄積がないからレベルの低い美術館しかできないこともある。現代美術はその多様なあり方のゆえに大きな可能性をもっているが価値観の違いによって評価が定まらないということがある。地域においては出身作家の作品展示の場を求める意向、また作品を収集する傾向があり、これも時には問題となる。

（4）動物園・水族館

最近、生物館園でもっとも話題を呼んだのは旭川市の旭山動物園であろう（図2）。入館者数が落ち込み、休園・廃園の危機下にあった動物園がよみがえったのである（小菅、2006；原子・亀畑、2006）。北海道の中央部にあるという恵まれない立地条件にもかかわらず、東京の上野動物園を surpass 入館者を迎える状況にまで変わったのはリーダーの確かな考えの下、見る側の視点に立った動物の生態・行動の見せ方をつくった故である。囲うのではなく開くというセンスが感じられ、自然体でいる動物をありのままの姿で見られる状況が生まれたのである。

この成功は各地の、どちらかといえば低迷傾向にあった動物園・水族館を刺激した。大学と提携して「見せる動物園」をつくろうとし、民間との協力によりグッズ・イベント・設備などの面での改革を目指している大阪市の天王寺動物園、同様に大学と協力して「教える動物園」に取り組む八木山動物園（仙台市）、動物園・植物園を一体とした東山総合公園（名古屋市）の、約70年ぶり



図2. 旭山動物園。
Fig. 2. Asahiya Zoo.

の大改造（生態園的な展示を企画）など、各地でさまざまな動きが見られる。

日本には世界中の水族館の約20%、約70館があるが、ここでも多様化が進んでいる。大型化が進み、大型の魚の行動が自由に見られるようになった。イルカやシャチの演技は今では各地で見られるし、希少な水生動物・魚の展示も目立っている。最近の傾向はやはり新しい見せ方、参加体験などであろう。加茂水族館（山形県鶴岡市）にはクラゲ展示室（クラネタリウム）があり、常時30～40種のクラゲを見ることが出来る。クラゲの形の不思議さ・美しさ・珍しさを体験でき、さらにレストランには「くらげの刺身」・「クラゲまんじゅう」がある。大洗水族館（茨城県）は生態系展示を目指し、環境教育のプログラムをもっている。水族館の裏方を見る「バックヤードツアー」では飼育システムや飼育員の仕事の様子を見ることができる。

水族館の歴史的な発展を見ると、「見世物」→「生きものを見せる」→「動物ショー」→「生態系を見せる」→「多様な見せ方」と変わってきている。これから先、さらに、展示のほか、水族館の基本的な役割、飼育繁殖法の確立・自然保護のセンター的役割、普及などに力を入れることも求められる。

（5）サブカルチャーの博物館

今世紀の初めあたりから、いわゆるサブカルチャーの博物館が盛んになり始めた。音楽、マンガ、アニメ、映画、お笑い、スポーツなどである。現在では時代が変わって、もはやサブカルチャーとは言わない時代になって来ている。基本的にファンが多く、博物館において教育・学習よりも楽しめることが求められているのだろう。博物館の利用者は館種にもよるが高齢者、子供、婦人が中心であるが、この場合は若者を含めて多様な階層が気楽に利用していると言える。

そんな中で2009年度の補正予算117億円が付き、計画されたのが「国立メディア芸術総合センター」、いわゆる「アニメの殿堂」である。マンガ、アニメ、ゲーム、コンピュータアートなどを「メディア芸術」とし、その分野の先進国日本にその国際的な拠点をつくろうというわけである。

博物館をつくるとき、3つの要素「もの・資料」、「人」、「場・建物」が必要なわけだが、急に思いついて立上げて、まともなものが出て来ると考えているのだろうか。景気対策だからということ

で、早速に建物の工事にかかることになるのだろうか、中身はどうするのだろうか。この規模の博物館にふさわしい十分な、それなりの質・量の資料とそれを整理し・しかるべき利用が出来る体制とそれが出来る人を用意しなければならないことを理解しているのだろうか。

建物の設計さえ不明であり、ましてや資料の収集・研究、展示をどうするかは決まっていない。2年間ほどで完成し、運営は民間に委託し、費用は入場料で購うというのは夢物語である。つくすることに問題があり、さらにその後の運営が見えていないということでは、まさにばら撒き政策のひとつというしかないだろう。報道によれば、新政権の発足により、補正予算削減対象になったということであるが、当然であろう。

確かに、マンガやアニメはいまや日本を代表する文化の一つかもしれない。産業・観光といった面での貢献もあるだろう。そうかといって、これだけ巨額の費用をかけて、巨大なものをつくる必要がどこにあるのだろうか。

今、日本にはすでにこの分野に関する博物館・図書館などがある。それらは決して一朝一夕にして出来たものではなく、その基礎には地味な、長年にわたる個人コレクションがある。これらは収集・保存、研究の努力が続けられた結果である。新しく巨大な「ハコモノ」をつくるのではなく、こうした既存の博物館・コレクションを巻き込んだ計画とすべきではないか。国の機関、国立国会図書館や国立近代美術館には映像を含めて資料が多く収集・保存されているはずである。

新しい、多くの人に愛される文化を広め・保存することは大切なことで、未来に向かっての展望もある。ぜひ、研究・人材育成も含めて、正しい・確かな対応を考えてほしい。

（6）ナイトミュージアム

博物館の展示品・恐竜・動物・人物などが夜中に動き回るという映画がつくられた。成功したと見えて、今年、その2が公開された。夏休みに向けての企画と言ってしまうまでもだが、博物館を舞台にしていること、原則的に動かないものが動くという意外性から興味を引くことは間違いない。

それと関連してではないだろうが、夏休みになると各地の博物館でナイトミュージアムの企画が行われている。夜の動物園や水族館、博物館を体験しようというのである。動物や魚たちは昼と違った行動をするから、昼間見る状況と異なるわけである。違ったものを見るという面白さがひとつあるわけだが、さらに夜という違った環境で見ることにポイントがある。あまりよい比喻ではないが、お化け屋敷的な興味である。

博物館では恐竜のギャラリーで行われている。そこで1泊という企画もあって、ここまでくれば「恐竜と一緒に眠った」という、普通では考えられない珍しい体験となる。こうした意外性を持った企画は本筋ではないかもしれないが、ひとつのやり方である。夜でなくても、恐竜や魚でなくても、例えば歴史や民俗、考古の展示でも可能である。古くから行われている博物館の裏方（収蔵庫や研究室、飼育室など）見学するのはこの原点である。

（7）ショップ・グッズ・レストラン

最近、博物館に関して大きく変わったのはショップとそこで扱うグッズ、レストランである。糸魚川（2009a）によれば、全体として40%以上の館にショップがあり、自然史館では50%を超えている。直営が1/2～2/3である。レストランは25%前後の館

にあり、 $\frac{2}{3}$ が委託である。これらの半分以上が入館しなくてもそこへ行ける仕組みになっている。

グッズについてみると、いろいろな工夫が見られる。そのひとつは自館のオリジナルグッズを作り、それをショップの目玉とし、さらに他館へも提供するというやり方である。ロンドンにあるビクトリア&アルバート博物館は別会社として自館のブランドを扱っており、強力な販売力を持っている。売上高が年間に1億ポンドを超すといわれる。日本の博物館でも多くのキャラクター商品を開発・販売しており、ブランド品も多い。Tシャツやバッグ、スカーフからエプロンまで多様である。

最近の朝日新聞で報じられたのはスガキヤ（名古屋市）のラーメンフォーク（スプーンとフォークが合体している）で、ニューヨーク近代美術館（MOMA）でショップの商品として採用され、人気を呼んでいるとのことである。

やや旧聞に属するが、国立東京近代美術館は2002年に改装オープンしたが、その折に開放的なレストランができ、人気を呼んでいる。都内の人気店の支店を開設し、外からも利用できるのが好評であるという。オリジナルなメニューを持つレストランのある館として、岩手県奥州市前沢の牛の博物館がある。地産の全国ブランドの前沢牛を材料とした、ステーキ・しゃぶしゃぶ・焼肉・カレーなどがある。ショップには地元産の各種商品が置かれていて、地域と密接に関連していることを示している。鹿児島県の指宿市考古博物館（時遊館 COCCO はしむれ）には、黒米のおにぎりやさつまいもを加えた古代弁当があり、この博物館にふさわしいメニューとなっている。

この他、全科協ニュース 30(2) (2000) には「博物館の食堂」の特集があり、ミュージアムレストランおよびそのオリジナルメニューの紹介がある。

(8) その他

・モバイルミュージアム 東大総合研究博物館と興和不動産の産学連携プロジェクトとして、モバイルミュージアム 001 が2007年に東京赤坂インターシティにオープンした。東大所蔵の博物館資料をパッケージ化して貸し出し展示するものである。半年ごとに展示を入れ替え、3年間に成否を検証するという。新しい博物館のあり方を問う試みである（中日新聞、2007/01/24 夕刊）。実見（図3）したが、意図はわかるが、現実には広いロビー



図3. モバイルミュージアム 001（東京赤坂インターシティ）。
Fig. 3. Mobile Museum 001 (Tokyo Akasaka Intercity Building).

に数点の展示ケースが用意されているだけで、迫力はない。実際にどのくらい人の興味を引くか難しいところである。

- ・五感で体験する博物館（1） 静岡県立美術館—ロダンの彫刻の前でポーズをまねする体操をする。目の不自由な人は彫刻にさわってもよい。
- ・同上（2） 感覚ミュージアム（宮城県大崎市）—五感をテーマにしている。身体感覚空間と瞑想空間に分かれ、感覚体験が楽しめる。例えば紙縫りと自然の香り、音で構成した「香りの森」の展示がある。
- ・同上（3） 国立民族学博物館—企画展「さわる文字、触る世界」（2006.9） 全旨の研究者が企画した展示で、実物や模型に触ってみたいことができ、触覚による「もの」の区別を体験できる。視覚や聴覚だけに頼らない、ユニバーサルデザインへつながる試みである。
- ・外国では—「メガ美術館」の誕生 世界的に有名で、大きなコレクションをもつ美術館（例えばニューヨーク近代美術館）が所蔵品を有効に利用し、かつ国際化に対応しようとする試み。日本の美術館は連携して借りる立場にある。こうした貸借はすでに始まっている。

その他、博物館で会費制のパーティーをやる試み、展示のジオラマの中の建物模型のオーナーになってもらう試み、農業博物館で農産物を販売する試みなどもある。

2) 博物館のキーワード

糸魚川（1999）は「これからの自然史博物館を考えるうえで重要と思われる事柄」をキーワード・キーセンテンスで示している。それを簡略化・一般化して示すと、次のようになる（順不同）。

人 もの（資料） 多様性 蓄積 研究 教育 情報 自然史学 人と自然 自然観 学芸員 館長 建物 収集 展示 展示の3つのレベル 学習 博物館学 博物館法 学芸員制度 管理・運営 両極性 パラダイム 包括的 個性 積極的 前進的 みる側 発想の転換 多様化 選択 意外性 しかけ 楽しみ・遊び 分化 総合 地域 地球 やる気 放散 収斂 ファジイ 変える 参加体験 マーケティング 住民のニーズ 自己評価 交流 ネットワーク ショップ レストラン 国際交流 野外施設 個人コレクション 公共コレクション 情報システム 災害 リストラ アクセス 周辺環境 複合施設 入館者数 運営費 常勤職員 評価 自然保護 エコミュージアム

その後の変化も考慮に入れて、追加・整理し、他の館種の博物館のことも含めて考え、再編成すると以下ようになる。

・1 次的なキーワード

収集 保存 研究 展示 教育普及 学習 情報 管理運営 社会活動 資料（もの） 人 場（建物） 博物館法 博物館学 博物館界 つくる つくりかえ 博物館の分類 大学博物館 ビジターセンター エコミュージアム 「えこ」ミュージアム 地域性 国際性 立地 近代化 包括的 進化 発展の法則 人と自然 多様化 分化 総合 ファジイ コレクション

・2 次的なキーワード

見る側 楽しみ・遊び やる気 ニーズ 音声 動刻 技術 ハンズオン インタープリター 音声ガイド 参加体験 展示業者 ホームページ パソコン 財政 評価 指定管理者 独立行政法人 PFI ボランティア 友の会 ネットワーク 環境

観光 健康 館長 学芸員 職員 老朽化 再利用 ミュージ
 アムショップ ミュージアムグッズ レストラン ミュージアム
 サービス 災害

これらのキーワードを基礎として、連結・整理・総括して項目立てをし、それぞれについて解説・論議する。この中には糸魚川(2009a, b, c)において議論されているものもあるが、さらに解析・発展させてまとめている。それは最終的に「包括的博物館」という表現のできる博物館をイメージすることである。

2. 博物館の分類体系

博物館には多様な分野のものが含まれ、日本でもさまざまな切り口による分類・区分が行われてきている。その最初分類と思われるものは一記者(1929)によるもので、博物館研究の第2巻11号に掲載されている。

その基準とされているのは「内容(館種)」と「他の見地」の2つで、さらに前者は美術、歴史、科学に3分され、さらに細分されている。後者は関係区域・維持方法・事業・管理の方法に区分され、その後に各館の定義が記述されている。ほぼ同時に棚橋源太郎による「博物館施設近時の傾向」(講習会での講演要旨)があり、博物館の基本に関して解説されている。博物館についての認識が高まっていたと思われる。

第2次世界戦争の戦後すぐ1950年に、棚橋源太郎は「博物館学綱要」を執筆・出版したが、これは日本における最初の、博物館学の体系を論じたものである。その第2章には「博物館の種類」があげられている。それ以後、多くの研究者によって博物館学が論ぜられ、その多くは「博物館の種類」を扱っている。表1はそれらのうちの主なものの、区分の基準とされた事項をまとめて示

したものである。

これらはそれぞれ特性をもっている。棚橋(1950)はその後の区分の最初の基準となったものであるが、特に「地域」において、全国の各地への配置について触れている。当時の状況においての、国立(東京・大阪・京都・奈良)・地方(中小都市)・郷土(町村)・観光(公園、山岳、海洋、温泉など)といった地域区分とそこにマッチした博物館を配するという考えは興味深い。また、利用者による区分においての「教育」は世界の各国にその名があるが、多様であるとし、いまでは多くの博物館が教育的であり、区別の必要がないとしている。

鶴田(1956)は博物館の目的(収集・保管・研究・教育普及)が達成されている程度によって標準博物館と特殊博物館に区分し、さらに後者を強調していることと足りないことによって区分できるとしている。伊藤(1978)は社会教育的な視点からの区分を行ったが、その中での機能や目的に視点を置いての区分は新しい考えとして注目された。

外国での博物館の区分はどうであろうか。糸魚川(1982)はMuseums of the World 第2版(1975)に基づいて150カ国17,500館の区分を紹介している。I C O Mの分類に従ったものであるが、18のタイプに区分されている。指摘されているように、分野別と形式別の区分が混じり、かつ、限られた実際的な館種名があげられている。糸魚川(1999)は同じ本の第4版(1992)にある「博物館の区分」について述べ、次の館区分を示している。

農業博物館 民族学博物館 考古学博物館 装飾美術館 美術館 総合—一般博物館 歴史遺跡 歴史／公事博物館 軍事博物館 音楽博物館 自然史博物館 野外博物館 パフォーマンス芸術博物館 宗教美術博物館 科学・技術博物館

わかりやすいが、第2版と同様、区分の基準があいまいで、実用的ではあるが科学的な区分とは思えない。

表1. 博物館の区分の基準。

Table 1. Criterion of the division of museums.

	棚橋*	鶴田*	富士川*	伊藤*	新井*	加藤・椎名
	(1950)	(1956)	(1971)	(1978)	(1979)	(1990)
館種・資料	○	○	○	○	○	○
設立者	○	○	○	○	○	○
管理・運営	○	○	○	○	○	
利用者	○	○	○		○	
地域	○	○	○			
場所	○	○	○		○	
財源		○	○			
目的		○		○		
機能				○	○	
制度(法)				○	○	

* 丹青総合研究所(1986)に詳細が示されている

表 2. アメリカ博物館協会 (1991) の区分 (糸魚川, 1999).

Table 2. Division of American Association of Museum (Itoigawa, 1999).

Art (芸術), Children and junior (児童・青少年), College and university (大学), Company (会社), Exhibition area (展示地域), General (総合), History (歴史), Library having collections of books (本のコレクションのある図書館), Library having collections other than books (本以外のコレクションのある図書館), National and State agency, council and commission (国立・州立の機関・協議会・委員会), Nature center (自然センター), Park museum and visitor center (博物館公園・ビジターセンター), Science (科学), Specialized (その他, 特殊).

また, American Association of Museum (アメリカ博物館協会) の Official Museum Directory (1991) の目次にある博物館の区分を示している (表 2). 芸術・歴史・科学はさらに細分されているが, これも博物館の区分としては実際的であるかも知れないが, 適切な区分とは思われない.

この区分の 1986 年版, カナダの Canadian Museums Association による分類 (1986) が丹青総合研究所 (編) (1986) に引用されているが, やはり偶然的で論理的ではない.

このように見てくると, 博物館の区分は様々で, それぞれ意味をもっている. 例えば, 設立主体による区分は館の規模に関連し, また, 公立と私立とでは運営その他で大きい違いがある. しかし, 館種 (扱う資料に基づく) による区分がもっとも主要で普通な区分といえよう. これからの議論は主として館種に基づく分類 (区分) について行うことにする.

現在の日本における館種区分には日本博物館協会の区分 (総合館, 歴史館, 郷土館, 美術館, 生物館園, 理工館, 自然史館 (前出)) と丹青研究所の区分 (歴史館と郷土館がなく, 代わりに人文館が設けられている) などがある.

糸魚川 (1999) は博物館の要素と活動 (機能), その相互の関係をまとめている (図 4). また, 要素のうちの「資料-もの」の特徴を軸として博物館が区分できることを示している (表 3). これらを見ると, 「もの」の属性によって, 博物館の特性が決まることがわかる. すなわち, 美術館は原則的に美術品 (1 点もの) を資料としている. 動植物園・水族館は対象が生命をもった生物

表 3. 資料を軸とした博物館の区分 (糸魚川, 1999).

Table 3. Division of museums based on character of materials.

カテゴリー		館区分	主たる資料の特徴
芸 術		美術館	美術品(一点もの)
科学	人文・社会	人文系博物館	実物・複製など
	自然	自然史系博物館	
		生物館・園	生物
		ビジターセンター	現地の自然
		理工館	模型・複製など
総 合		総合・郷土博物館	実物・複製など
		エコミュージアム	地域の自然・文化
その他		児童博物館 大学博物館など	いろいろ

で, しかもそれは基本的に複数存在し, 再生産するという特徴をもつ. 理工館の資料は実物でなく, 複製・模型であってかまわない. 理工館には資料はない, あるいは必要ないという考えさえある. ビジターセンターとエコミュージアムは広い地域を対象とするので, 「もの」を基準としたとき, 尺度が異なるので同じように扱えない. エコミュージアムがニューミュージアムといわれるゆえんである. 「もの」の属性を基準としてない館 (例えば子供博物館, 大学博物館など) 区分はここでは除外しておく.

こうしてみると, 博物館として一まとめにして扱っているものがかなり多様であることがわかってくる. 要素のひとつ, 資料だけに限ってみても, それと関連して機能が異なり, 対象とする利用者にも違いが生じていることがわかる. それではもっとも普通の, 一般的に博物館と呼んでよいものは何だろうか. 博物館の基本的なアイテムが「自然」と「人」, そしてその両者の「かわり」であると考えると, 基本的に歴史-人文分野と自然史分野がそれにあたり, それに関連する, それぞれの分野の館 (基本的には歴史館と自然史館, さらにそれぞれの専門単科の館), その両者をあわせもつ総合博物館・郷土館が博物館の主体であることが理解できる. そこでは自然と人に関わる「もの」を資料として収集・保存し, 調査研究し, 展示・教育普及することが科学的に行われることとなる.

他の分野の館もある一面では共通な点をもつ. しかし, 美術館は芸術的な「もの」を扱い, 科学として扱う立場と違うからここでは除外して, 論じない. 理工館・生物館園は資料の性質が異なること, 教育的意味が強いこと, 観光的側面ももつことなどにより本来の博物館とは少し意味が異なる. エコミュージアムやビジターセンターは共通する点が多く, 包括的な博物館を考えるとときに扱うこととする. このように区別して考えることが出来るが, 現在ではお互いの境界はあいまいになっており, 区別できない・あるいは区別しないことも多い.

博物館の主体は, 歴史博物館および自然史博物館, それと関連する分野の専門単科の博物館, 集合体である総合博物館, 郷土館

活 動		要 素					
		人	もの	建物			
		学芸員 事務方					
社 会 活 動	情 報	研究	収集・保存	◎	・	◎	◎
			調査・研究	◎	・	◎	○
		教育	展示	◎	・	◎	◎
			教育・学習	◎	・	○	○
		運営・管理	・	◎		○	
		◎ 大 ○ 中 ・ 小					

図 4. 博物館活動 (機能) と要素 (糸魚川, 1999).

Fig. 4. Museum activity and elements.

であると言える。現在は多様なアイテムが博物館の主題とされているが、その中には、ここであげた4つの類別の中に含まれるものが多数存在する。

博物館の本来の使命は自然と人を時間と空間の軸の中で捉え、それらのたどってきた道とその現在見られる姿を明らかにし・広めること、そして未来を展望することにある。これは博物館を狭義に捉えた場合の考えで、他の性質をもった“博物館”を広義の博物館として、応用・適用の対象として扱うことも可能である。

3. 博物館学の系譜

糸魚川（1993）は加藤（1990）を引用して、日本で博物館学という言葉が登場するのは棚橋（1950）であるとしている。すなわち、棚橋はその著書「博物館学綱要」において、欧米において数十年前から使われていたと述べている。しかし、その起源は厳密でなく、ドイツで Museumkunde が使用されていたが、アメリカに museology があった証拠はない。

こうしてみると、この言葉は第2次世界戦争後に普通に使われるようになり、博物館学が認識されるようになったといえよう。日本では博物館法の施行に伴い一般化したと思われる。爾来、博物館の増加に伴い、それをどのように捉えるかという、本来の博物館学に関することがあり、他に学芸員単位取得のために博物館学をどのように教授するかという問題が生まれた。この両面の博物館学について、これまでに多くの博物館関係者・学者が論文を書き、著書を著している。現在までの系譜をおもにその基本的な考えに基づいて整理してみる。

1) 棚橋源太郎

日本の博物館の「育ての親」といわれる棚橋は博物館法の制定（1951年）の中心的役割を果たしたが、その前年（1950）、それまでの博物館研究を基礎として「博物館学綱要」をまとめ、考えを明らかにした。

これは日本における、博物館学のスタートとも言えるものである。「博物館経営の理論と実際」を概説するとして、海外の事例を多く引用しながら、博物館学の体系を構築している。博物館史から始まり、種類・職能・資料と蒐集・展示・設備と運営・教育と研究、管理・建築まで、詳細に博物館について論じている。時代的な変化があるので、現在的でないこと、あるいは不足していることもあるが、柱となる点はしっかり抑えられていて、現在でも通用する。その後の博物館学に大きな影響を与えている論考といえる。

いくつかの特徴的な考えを挙げると、①職能（役割）において、個人的な利用より社会奉仕へ向かうべきであること（限られた階層者に限らず、一般の利用を増やす）、②館種別の職能を上げていること、③展示において系統陳列と集団展示（例えばジオラマ）があること、④館長論（学芸員からなるのがよい、官吏・学校長などは不可、大博物館ではより多機能の人物が要求される）、⑤学芸員の養成の必要性 などが、先見の明といえよう。

矢島（2009）は、棚橋が研究機関としての博物館を意識しながら、社会教育機関としての役割をもつことを強く主張しているとしている。

2) 鶴田総一郎

日本博物館協会（編）（1956）「博物館学入門」は前編（総論）

と各論からなるが、前編の総論が博物館学に相当し、鶴田が執筆している。博物館学の目的と方法、博物館史、博物館の目的、目的を達成するための方法、博物館の経営 の5章からなっている。「目的」の章において、目的の機能的分析（収集・整理保管・研究）、結果的分析（資料・施設・学芸員）の2つをあげ、次の「達成するための方法」の章で収集法・整理保管法・調査研究法・教育普及法（展示と教育活動）を扱っている。「経営」の章では個として、集まりとして、そして組織として博物館（群）を捉え、また、組織における館長の位置づけ（経営方針の確立、仕事対策、部下の掌握、対外的交渉など）をし、的確な視点を持った論述をしている。

博物館行政に関して、制定されたばかりの博物館法に触れ、十分ではないが学芸員制度が確立されたことは重要であると指摘している。さらに、行政については今後の問題として、①全国博物館組織網をつくること、②学芸員制度を確立すること、③学芸員の職階の確立・身分保障をすること、④免税措置・資料の確保・予算措置 を挙げている。現在に通じる卓見である。

なお、総合博物館についての記述がないが、県立レベルの総合博物館がほとんどない時代であった故であろうか。本書の後編には各種の博物館について、分担執筆がなされている。巻末には付録として文献・博物館リスト・法令があげられている。

3) 新井重三

新井は地質学出身で、ある時期から博物館学を主体とした研究者となった。後年はエコミュージアムの研究で知られたが、早くから博物館についての論述がある。青木（2009）はその博物館学思想について、次の項目を挙げて議論している。

（1）総合展示 棚橋の言う「総合陳列」と異なり、標本の量の集積・総合によって質的变化を起こし、統一をもたせた展示様式とするもの

（2）二重展示 展示室と収蔵庫の2つの場所での展示を意図したもの

（3）提示・説示・教育展示（直接的に教育を目的とする展示—例えば科学館などの展示）の提唱

（4）野外博物館

（5）エコミュージアム

この他、新井は博物館学講座（10巻、1979～）の第1巻において博物館学総論を編集・執筆しているが、このことについては後述する。

4) 伊藤寿朗・森田恒之

編著として博物館概論（1978）がある。1970年代に入って日本では公立博物館が急増した。これを博物館が市民のものになったことと捉え、この博物館の青年期と言うべき時期における博物館学をまとめようとしたものである。

基本的視点として、①社会→博物館、②博物館→社会、③博物館の必要なこと、なすべきこと、④博物館員はどうしたらよいかを置き、〈総論〉、〈機能〉、〈資料〉の3編に分けて構成している。総論編ではまず概念を説明し、続いて「人間社会と博物館」（人文系と自然系）、博物館史に触れている。機能編は4つの機能と3つの基礎を解説している。

現場の博物館員が共同で執筆し、地域の公共博物館づくりを念頭に、これをモデルとして論じたとし、機能編を中心にハンドブックやマニュアルとしての活用を望むと述べている。

分担執筆にもかかわらず、よくまとまっている。その成立から

見て実用的ではあるが、学としてのポイントは抑えられている。社会教育学的な側面が強いといえよう。

5) 倉田公裕

1979年に「博物館学」を著わした。博物館学概論、収集論、研究論、展示論、博物館教育論、学芸員論、博物館社会学、博物館利用者、地域（県立）博物館論、付録からなる。博物館学の基本を抑え、論理的にそれぞれの項目をまとめ、学としての博物館学を論考している。その点では日本における、最初の正統的博物館学である。

博物館学の定義、収集論（空間的・時間的な広がり、既知→未知、原理→応用、原因→結果、一般→特殊への発展）、学芸論、博物館利用者論において新しい理念が提供され、地域博物館における総合博物館から総合博物館へ、郷土学など、ユニークな考えも提示されている。

その後、この書は倉田公裕・矢島国雄（1997）：新編博物館学として改定・刊行された。旧版に基軸を置き、その後の諸論文を加え、大学における、学芸員資格取得のための博物館学の新カリキュラムを考慮してまとめたものである。

概論が博物館学（museology）、各論が博物館技術（museography）を扱っている。最近の情報をとり入れて関連分野全体に及んで記述しており、実用面では有用になったといえようが、旧版に見られる個性はやや薄らいだ感がある。

6) 加藤有次

加藤は早くから博物館に関わっていたが、最初にまとめたのが博物館学序論（1977）である。総論の「あとがき」において、完成されてない状態での序論であると述べている。確かに、学としては体系的でない面がある。約20年後、「博物館学総論（1996）」を出版したが、これが加藤の博物館学といえるだろう。本論としての博物館学及び博物館の歴史的研究（1. 博物館と博物館学、2. 博物館学と博物館学史、3. 博物館の史的変遷）と参考論文「現代博物館の分析的研究」に分かれる。

博物館の歴史的な経緯を解析して現状分析を試みているが、基本的には棚橋以来の、これまでの博物館学を総括したものである。例えば博物館の分類ではそれまでの、いくつかの分類を引用しているに過ぎない。「学校博物館論」、「Curatorと学芸員養成」などの新しい視点に立った議論もあるが、学問体系としての新味はなく、実用的な博物館学になっている。それまでに、多くの先学によって論じつくされた故であろうか。

7) 博物館学講座（出版物）

博物館学講座は二度（1979年、2000年）出版されており、それぞれの第1巻は総論、概論に当てられている。1979年版の第1巻は新井重三によって編集され、博物館学に関連する総論が執筆されている。新井は自著論文およびそれまでの博物館学に関する各種の論文を着実にまとめて、ここでの博物館学の骨子としている。基本的には棚橋（1950）や、鶴田（1956）に従った概念で、それに自分自身の考えをプラスしたものといえるだろう。第1巻の約半分のページがそれに相当し、後半が館種別博物館のあり方に当てられている。講座という特性からして、こういう形はやむをえないところである。

2000年版は加藤有次によって主たる概論部分が執筆されている。やはり、加藤自身の著作（1977・1996）をベースにしている。総論、各論（1）「博物館の論理学」が博物館学に相当するとこ

ろで、他分野との関連を論じているのは新しい視点であるが、水藤（2003）も指摘しているように、それぞれの分野での博物館学というはおかしい。また、第6章の館種別博物館学はそうした扱いが成立するとは思えない。講座という性格からみても適当でないと思われる。

8) その他の著書

博物館学に関連する書物のいくつかを簡単に紹介する。

（1）富士川金二（1971）博物館学、成文堂：それまでの論考（例えば棚橋）を基礎とした博物館学。一般的である。機能の中に展示がないのは不思議であり、一方、評価に1章が当てられているのは他にないことである。

（2）大塚和義（編著）（1990）博物館学Ⅰ、大塚・矢島国雄（編著）（1991）博物館学Ⅱ、放送大学教育振興会：放送大学のテキストブック。現代における博物館のあり方（Ⅰ）、Ⅰで取り上げなかった問題点（Ⅱ）を扱う。さまざまなアイテムが取り上げられているが、いわゆる「学」とは意味合いが少し異なる。

（3）中川成夫（1988）博物館学論考、雄山閣出版：エッセイ的、各論的。

（4）網干善教・小川光陽・平 裕史（編著）（1995）博物館学概説、仏教大学通信教育部。関 秀夫（1995）日本博物館学入門、雄山閣出版。大堀 哲（編著）（1997）博物館学教程、東京堂出版。網干善教（編著）（1998）博物館学概説、関西大学出版部。ほか：学芸員養成課程のための「博物館学」テキスト。

（5）梅棹忠夫（1975）民族学博物館、講談社：民族学博物館を主題とした博物館学。

（6）上田 篤（1989）博物館からミュージアムへ、学芸出版社：博物館づくりのあるコンセプト。

（7）広瀬 鎮（1992）博物館社会教育論、学文社：博物館の社会教育論。

（8）諸岡博熊（1995）企業博物館、東京堂出版：ミュージアムマネジメントについての論述。

（9）西野嘉章（1995）博物館学、東大出版会：フランスの博物館経営の事例。

（10）西野嘉章（1996）大学博物館、東大出版会：大学博物館論。第10項参照。

（11）千地万造（1998）自然史博物館、八坂書房：博物館長の経験を基にした自然史博物館論。

（12）布谷知夫（2005）博物館の理念と運営、雄山閣出版：利用者の視点、相互関連の事業、研究成果の発信を基本とした、現場学芸員の博物館学。

（13）T. Ambrose & C. Paine（1993）Museum Basics, ICOM 日本博物館協会（訳）（1995）博物館の基本、日本博物館協会。世界の博物館のすべてに適用される研修の考え方。序論、博物館と利用者（展示・教育活動を含む）、コレクション、建物、管理など。学芸員についての記述がない。

このように見てくると日本の博物館学は50年を超す歴史をもち、内容的にも一定のレベルをもっていると言えよう。ただ、実際の側面での研究・記述が主で、理論的な面に欠けるきらいがある。倉田（1979）をベースとして、現代的な問題も取り入れ、いわゆる博物館学（museology）の理論的側面を強調した新しい博物館科学（museum science）を創出すること出来ないものだろうか。応用博物館学（applied museology）あるいは博物館技術学

(museumology) はそれを基礎として実面をさらに充実させる学として確立できればよい。古い時代から確立している諸科学に対応した形のもので出来ないう限り、博物館学は、そして博物館はマイナーな位置に置かれたままにとどまるだろう。

2007 年度から科学研究費補助金(科研費)の分化細目に「博物館学」が時限付で設定され、現在に至っている。博物館学がやっと学問体系の一つと認められ、申請できることになった。これまでの経過を見ると、3 年間にわたって、113 ～ 78 件の申請があり、25 ～ 20 件が採択された。金額にして 3 年間で 21,297 千円である。時限付であるから、実績が上がらなければ消滅する(2010 年度は継続が決定)。踏ん張りどころである。3 年間で申請件数が減少しているのは気になるところである。2010 年度も継続されることであるが、申請件数が増えるよう PR すること、それよりさらに申請に努力することが求められる。

4. 博物館法と博物館界

1) 博物館法

博物館法は 1951 年 12 月に公布された。それ以前に制定された社会教育法の精神に基づき作られたものである。棚橋源太郎初め多くの博物館関係者の努力によって、戦前からの運動が実って実現したもので諸外国にはない日本固有の法律である。本法のほか、施行令・施行規則などの関係法規があり、日本における博物館のあり方を規定している。制定以来、何度かの改正が行われた。最近では 1996 年の施行細則の変更(学芸員資格取得のための単位規則)、1998 年の博物館設置基準の改正(それまでの、学芸員の数の規定を緩和して努力目標とした)が行われたが、50 年にも及ぶ年数を経て、実情にあわない側面があると指摘され続けてきた。

こうした状況の中で、文部科学省は博物館法の改正を目指して行動を起こした。榎本(2008)によってその経緯を記すと、2006 年に「これからの博物館の在り方に関する検討協力会議」を立ち上げ、翌年に「新しい時代の博物館制度の在り方について」の報告書を発行した。これには博物館の現状と問題点が述べられていて、将来へのビジョンも盛り込まれている。さらにこれをベースにして、委員を増員しての委員会、その下部組織の「学芸員の養成に関するワーキンググループ」がつくられ、活動を開始した。主に大学における学芸員養成課程の見直しが議論の中心で、博物館側と大学側の意見の開きは大きかったが、方向性は見えてきた。それは主に科目数・単位数の増加を考えるものであった(例えば 9 科目 19 単位)。

そして、2008 年 6 月、改正が行われた。それは

第 1 章(総則)第 2 条(定義): 事業に「レクリエーション」を加えること、資料は電磁的記録を含むこと

第 3 条(事業): 資料に「フィルム」を加えること、学習の成果を活用する活動への機会の提供・提供を推奨することを追加すること

第 5 条(学芸員の資格): 学芸員補に社会教育主事・司書その他を含むこと

第 7 条(学芸員および学芸員補の研修): 必要な研修を行うこと

第 8 条(設置などの基準): 基準を定め公表すること

第 9 条(運営状況の評価): 評価を行い改善措置を講ずること

第 9 条の 2(運営状況についての情報提供): 地域住民の理解を深め、そのために運営状況の情報を提供すること

第 3 章(公立博物館)第 21 条: 博物館協議会の委員に「家庭教育の向上に資する活動を行う者」を加えること

付則: 交付の日から施行する

期待された改正は行われなかった。特に、委員会などではげしく議論された学芸員に関することは見送られた。実務を 1 年経験した上、学芸員資格をあたえること・一定年数以上の経験者に上級学芸員資格を与えるなどの案は実現しなかった。何のための委員会であり、ワーキンググループであったかとの声が聞かれた。

博物館法およびその改正については次のように考えることが出来る。

- (1) 現状にそぐわない面がある
- (2) 社会体制にマッチした抜本的な法改正が必要である
- (3) 社会教育法、現実の生涯学習との関連も考える
- (4) 現場の意見が反映されること
- (5) 民・公(官)の理解を深める
- (6) 博物館側では現場が多忙であり、深く考える余裕がなく、かつ、理論家が不足している
- (7) 実利に関係が薄いので無視される
- (8) 博物館学の不十分さ
- (9) ロビイストの不足(倉田, 2009)
- (10) 学芸員資格取得に関しての不備が大きい

2) 博物館界

博物館は機関であり、広い意味で公的なものである。かつ多数が存在するので共通の問題を考え・お互いの連絡を密にするための組織が必要である。博物館界にはそういった組織がさまざまな形で存在する。

(1) 日本博物館協会(社団法人)

1928(昭和 3)年、「博物館事業促進会」として発足した、文



図 5. 博物館研究.

Fig. 5. Museum Studies.

部科学省所管の公益法人である。全国的な博物館組織として主要な館が加盟している。「博物館研究」(図5)を発刊し、全国大会を開催している。各種の講習会・講演会・研修会・見学会など行い、また、調査・研究・支援なども行っている。1978年に50周年、2008年に80周年を迎え、それぞれ「博物館研究」を記念号とし、年表を作成し歴史を振り返っている。地方支部をもっている。

原則的に「館」の加盟で、個人会員も認められるが少ない。

(2) その他の全国規模の協議会など

ICOM日本委員会、各県・各地方の協議会、館種別の協議会(例えば、全国科学博物館協議会、全国美術館会議、日本動物園水族館協会など)がある。別に全国大学博物館学講座協議会もある。

(3) 全日本博物館学会

1973年の創立で最初の会員は204名であった。学会として活動し、全国大会・例会・見学会・研修会などを開催し、博物館学会誌、学会ニュースを発行している。歴史に関しては全日本博物館学会(編)(2004):全日本博物館学会三十年のあゆみに詳しい。

2008年現在の会員数は382人(被選挙人名簿による)である。職種別(2001年度会員名簿より)を見ると、

博物館関係	81(人)	36.6%
教育研究関係	59	26.7
行政関係	12	5.4
企業関係	24	10.9
その他(不明を含む)	45	20.4

計221名となる。

全体としてバランスの取れた構成であろうが、会員数が決定的に少ない。教育研究分野は博物館学プロパーの研究者が少ないことから理解されるが、博物館関係(学芸員)についてみると、全体の学芸員数は4500~5000人と推定される(糸魚川, 2009a)から、その加入率は2%前後ということになる。学芸員は博物館学の専門というよりも、別にそれぞれ専門分野(たとえば歴史学、考古学、植物学、古生物学など)をもっていて、その分野の学会(複数)に所属していることが多い。会費のこともあろうが、基本的に博物館学に対する認識が低いことに原因があるといっても過言ではない。多くの学芸員の加入があり、学会活動が盛んになることを期待したい。

(4) 関連分野の学会など

博物館・博物館学と密接に関連する分野の学会がある。

- ・展示学会 博物館展示だけでなく、広く展示の科学を研究する。
- ・博物館マネジメント学会 博物館の運営についての学会である。
- ・エコミュージアム研究会 ニューミュージアムといわれるエコミュージアムに関する会である。

(5) 企業などの博物館研究所

博物館を創るにはそれぞれの面で関連する企業が関係している。その中の展示関係の会社には調査・研究・企画などを担う研究所をもつものがある。たとえば、(株)丹青研究所、(株)文化環境研究所、展示文化研究所(名古屋市)などである。ニュース・レポートなどを出版している(電子版も含む)。これらの研究所のもつ、博物館についての情報量は膨大なもので、無視できない資料である。

博物館関連機関・団体のリストはやや以前のものであるが丹青

総合研究所(編)(1986)博物館・情報検索事典にあり、また、加藤・椎名(編)(1990)博物館ハンドブックにもある。日本の博物館のリストは日本博物館協会(編)(1978)全国博物館総覧(上・下)、丹青総合研究所(編)(1986)博物館・情報検索事典、大堀 哲(編著)(1997)日本博物館総覧などがあり、日本博物館協会の会員名簿、各県の博物館ガイドブックなどでも知ることが出来る。外国の博物館についてはBartz, A. et al. (ed.) (1992) Museums of the World, 4th ed. がある。

これからの博物館界は次の時代へ、新しい展望をもって、博物館の発展を目指さなければならない。在り方や運営など、実際の博物館活動を進めるためには、博物館相互の連携・学芸員の連帯が必要である。その意味において、全日本博物館学会への加入は必然であろう。同時に博物館法の、現代に見合った形への改正は絶対に必要であると思われる。

5. 学芸員と収集・研究

学芸員は博物館の柱であり、各種の業務を行う中心にある。

展示や教育普及といった表向きの活動とは別に、目立たないが基本的な活動も行っている。すなわち、資料を収集・保管し、研究するという仕事である。これらのことについてはすでに述べた(糸魚川, 1993; 1999)が、以前の論説をベースとして、仲立ちとなる資料も含めて、断片的になるかもしれないが新しい問題を中心に述べたい。

1) 学芸員

学芸員の数、位置づけ、求められること、あり方、養成・任用制度、研修、評価などについては前著(糸魚川 1993; 1999; 2009a)で論じた。日本では養成制度を含めて学芸員システムがまだ確立しているとは言えない。その結果として、おかれた立場によって条件が異なり、一概に論じられない側面がみられる。

大規模の館では多数の学芸員がおり、専門分野ごとに、あるいは職掌ごとに分担して活動することが出来る。そこでは意見を交わし・相談し・議論することが出来る同僚にも恵まれている。比較的労働条件もよく、財政的な基盤もしっかりしていて、十分に活動できる条件が用意されているはずである。しかし、中小の、少数のあるいは一人の学芸員しかいない館も存在する。こうした館では学芸員は孤独であり、多様な仕事を担当し、多忙であることが多い。しかも求められことは変わらないのである。

すでに述べたことであるが、学芸員には専門性、多芸性、協調性、国際性などが求められる。それに応えるためにはどうしたらよいか。資質はもちろん重要であるが、やる気、努力が必要である。一人で抱え込み、悩むのではなく、他へ協力を求めるのがよい。そのためには他館の学芸員、他機関の研究者やスタッフとネットワークをつくるのがよい。分野、地域によってはすでにそうした組織が作られ、活動し、効果をあげている(糸魚川, 2009a)。

地域の市民との協働も大切である。あるアイテムに興味をもち、何らかの活動をしたいと考えている市民は、いろいろな形で博物館の周辺にいる。そのレベルはさまざまであるから対応が難しい面があるが、不可能のことではない。大学や研究所と違ったやり方で共同調査や研究をすることは可能であり、博物館独自の研究を展開することもできる。

学芸員資格は大学で規定の単位をとれば、あるいは試験に合格

すれば取得することが出来る。しかし、現実に学芸員になることは大変難しいし、仮になったとしても、その力は博物館現場ですぐ役に立つものではない。博物館学の教育に問題があることは博物館法の不備と共にいつも議論があるところである。例えば、専門のコースが少ないこと、十分な教育のためにはカリキュラムに問題があること、実習のやり方に問題があること、大量粗製乱造のきらいがあること、などである。このことは学芸員資格取得を希望する人たち自身の問題でなく、日本における学芸員養成上の問題である。この基本的な問題を解決せずして学芸員の資質を問うことは出来ない。

学芸員になってからも研修の機会が保障されなければならない。博物館内におけるOJT (on-the-job-training) はもちろんのこと、しかるべきシステムの公的な研修のチャンスが用意されなければならない。欧米の状況も参考にして、新しい学芸員養成および研修のシステムをつくることは焦眉の問題である。同時に学芸員がいかに成果を挙げようとしているか、挙げたか、客観的な評価も必要である。

2) 収集

博物館活動の原点のひとつで、そのベースに資料があり、活動する主体として学芸員がある。収集は博物館をつくるきっかけとなっているが、人間の好み、趣味、欲望と関連して、古い時代から存在した。収集の原型は、例えば小宮 (2007) に見られるヴンダーカマーの思想、Lovric, M. (2007) (安原訳, 2009) の「奇妙な博物館」のコレクションにうかがわれる。財力の誇示、名誉の発露、自己満足など、その動機はさまざまだが人間の欲望と密接に関連して収集は行われて来たとし、行われている。

収集された「もの」ははじめは雑多な・整理されていない形であるが、それらは調査・研究されて資料となる。さらに一般化が行われ、博物館資料として共通化・汎用化が生まれて来る。そのためのマニュアルは確立しており、研究の材料となり、展示に使用され、教育普及のためにも使用される。

収集の形には (1) 採集 (主に学芸員による)、寄贈、購入、寄託などである。本来は採集であるべきだが、人文部門ではなかなか難しい。最近では自然史部門でも条件のない状態が起きている。購入は希少な資料を収集するためには不可欠である。自然物の場合はそれを貨幣価値で評価することに抵抗はあるが、それも時と場合による。

寄贈では個人のコレクション (ミニウム minium — 糸魚川, 1993) の場合は「もの」を集めるという博物館の基本づくりの活動で、これが博物館へ入るといことは「私より公」へという考えに基づくのであるが、これがもっとも妥当なそして普通の方法であろう。

資料に基づいて研究する分野が人文科学にも自然科学にもある。こうした場合、長年研究のために収集された資料は本来ならばその研究者が所属した機関において保存されるべきである。しかし、日本の現状を見ると必ずしも条件があるとは思われない。受け皿となるべき設備がないときには、その資料の行方はどうなるのだろうか。

最善のケースはしかるべきコレクション (博物館を含めて) に入ることである。受け皿はさまざまで、地域にあるか、国にあるか、あるいはそれが出来なくて世界のどこか、という場合もある。いずれにせよ、それが最善の形で利用される条件があることが必要

である。資料がきっちり保全されるハードの設備があること、同じ専門の研究者がいることも含めてソフト面が用意されていることである。

「資料」は博物館の活動 (研究・展示・教育普及) においてその価値を発揮するためには、きっちり整理・保存されることが必要である。そのためには整理の仕方をルーチン化すること、それは出来れば多くの博物館に共通する汎用システムであること、相互利用・貸借・交換などが出来ることが求められる。

最近では2次資料、特に情報資料が増加してきており、かつ、それが主要な位置を占めることが起きている。この分野の収集も今後無視することが出来ない。

人文部門・自然史部門において、現地保存の場合がある。この場合は収集＝保存であり、状況は異なる。この場合の収集については9. エコミュージアムと「えこ」ミュージアム において述べる。

3) 研究

博物館における研究は特に大学その他の研究機関のそれと異なることはない。ただ、すでに述べたように (糸魚川, 1993; 1999) 特徴もある。簡単にまとめると、「資料に基づく研究」、「地域の研究」、「博物館活動に関連する研究」である。

これらは基本的に博物館の機能と関係していることがらであるから、「博物館的研究」といえよう。ただ、研究には資料・人・場 (設備を含めて)・資金などの研究環境が必要となるが、本来研究が大きな割合を占めている大学や研究所と比べて十分でない側面がある。そこには各方面の無理解、たとえば博物館を単に教育機関、あるいは娯楽の場としてとらえることがあり、また直接的に効果が見えないものとして、厳しい財政下で研究費がない・少ないという状況が生まれている。

また、同じ博物館でも設立主体 (国・県・市町村・私立など) や規模により、その条件は大きく異なってくる。それぞれの博物館は知恵をしばって自館の特性をもった研究活動をしなければならないと思われる。いくつかの事例を示そう。

滋賀県立琵琶湖博物館は県立レベルで学芸員も多く、高いレベルの研究を進めている。その特性のひとつは「湖」というキーワードに表れている共通性である。琵琶湖から滋賀県 (琵琶湖と関連した事項が多く存在する)、さらに日本・世界へとつながるテーマがあり、具体的なことから抽象的なことへ広がってゆく。もうひとつは地域との共同 (協働) 研究である。博物館がもの (資料)・人を通じて地域とつながることである。そこでは地域という場における、自然と人との関連が主題となってくる。

大阪市立自然史博物館は県立と肩をならべるレベルの研究体制をもつと言えよう。特に地域を意識した研究活動を基礎として、さらに広がりを見せる活動が行われており、博物館に集まる人々との協働もうまく行っている。長年にわたって、寄贈を含めたさまざまな形で収集された資料は研究を支えている。

齊藤報恩会博物館は1933年に、財団法人立として仙台市に開館した自然史博物館である。地方に成立した自然史系の博物館は当時としては珍しく、ユニークな存在として際立った館であった。残念ながら最近活動を停止し、その15万点といわれる標本は国立科学博物館に寄贈された。主に東北地方の資料を収蔵し、この館での研究活動は助成研究と館独自の研究とに分かれるが、その成果 (古生物学・地質学・生物学などの分野) は Saito Ho-on Kai

Museum Research Bulletin に掲載されていて、画期的なものであった。こうした形の研究を早くから取り入れたのは十分でない条件下で、しかもこの当時（昭和戦前）として卓見である（図6）。

瑞浪市化石博物館は1974年、地域から産出した豊富な化石資料を基礎として開館した。人口4万人の小都市であるから、博物館のスタッフは少人数に限られ、学芸員は嘱託という形で始まり、



図6. 齋藤報恩会のあゆみ。

Fig. 6. Catalogue of "History of the Saito Ho-on Kai Museum".

後に職員として2人となった。開館時の理念として調査・研究活動をひとつの目標に掲げた。しかし、このスタッフでは不十分であったので、主に外部の研究者との共同研究という形で進められた。特に研究報告は執筆者・論文内容に特別な制限を設けず、館の活動と同調するものを対象とした。もちろん、論文自体のレベルなどはチェックしたが、地域性にこだわらない方法が現在（35巻）まで継続し、外国からの投稿があることにもつながっている。

これまでのべたことは博物館における基本的な活動でありながら、どちらかというとお荷物にされ、無視されがちな事柄である。条件はさまざまで、難しい面があろうが決しておざなりには出来ない、博物館の基本的な問題である。

6. 包括的展示

糸魚川（2009b）は「百物館」構想（糸魚川，1999）を原点として、包括的展示の考えを構築した。この考えは本稿の「包括的博物館」を発想する基本となるものであるので、再論する。

1) 展示

（1）陳列から展示へ

博物館研究第2巻6号に一記者（1929）は博物館の組合わせ陳列法という記事を掲載している。それは「博物館の陳列法は物品の種類に依る分類式陳列法と、この頃盛になって来た組合わせ陳列法の二つに大別することが出来る。（後略）」

である。この記述は「展示」についての早い時期の優れた考えであるが、「陳列」という言葉が使われている。

棚橋（1950）は展示についての考えを述べているが、ひとつは資源の二元的配置（dual arrangement）－研究と教育－であり、他は系統陳列（ものの属性・用途によって分類配列する）と集団陳列（関連する若干のものを組み合わせる；ジオラマや時代陳列；ドラマ化し興味をわかせる）の区分である。後者の2つはそれぞれ一記者（1929）の分類式と組合せ式に相当する。この章は「蒐集品の展示」となっているが内容では陳列という言葉が同時に使用されていて、区別が厳密でなかったことを示している。

鶴田（1956）は資料の排列様式として、a. 分類学的・系統的展示、b. 歴史的・発達史的展示、c. 総合展示、d. 課題展示に区分し、目的によって選ぶとしている。棚橋の区分と比べると、a, bが系統陳列に、cが集団展示にほぼ相当する。陳列という言葉は使用されていない。

新井は総合展示、二重展示、3種の展示（提示・説示・教育）を提案している（前出）。用語は展示である。時代的には1950～1970年代で、その後、「博物館学講座」（1979）に引用されている。

こうして見てくると、「展示」という言葉は戦後1950年代に使用されるようになり、博物館建設が盛んになる1970年代には定着していた。辞書で「陳列」の英語（display）の語源をたどると unhold（ひろげる）であり、show と同義語である。「展示」は exhibit で、hold out（差し出す；伸ばす；提供する）である。あまり大きな意味の違いがあるとも思われぬが、out に意味があるとも考えることもできる。

（2）新しい技法

最近、展示技術は著しく進んだ。技術的に見ると、まずコンピュータ技術の目覚ましい発達とその導入がある。それに関連しての展示は映像・画像・文字・検索・遊びなど、とどまるところを知らない。その他でも、音声・光・ジオラマ・イラスト・剥製・動刻などの面でこれまでとは違った効果が生み出されている。さらに、音声ガイドやインタープリターの導入は展示をわかりやすくさせた。

空間処理についても進歩が見られる。オープンになり、外－内のつながり・展示相互のつながりが強調され、複合的な効果を生むような処理がされるようになった。耐震設備も取り入れられてきた。

内容的には「もの」－「こと」－「はなし－まとめ」の3つの類型（糸魚川，1999のA, B, C）が見る側のⅠ～Ⅲの3つのレベルに対応する展示として捉えられる。すなわち点（point）－線（line）－集まり（mass）の展示構成である。

こうした3つの面の進歩により、展示はわかりやすく・面白く・見やすく・遊べる・手に取れる（ハンズオン）身近なものになった。これは現在の博物館展示の主流となっていると言えよう。ここでは深く論じないが、この流れはイージーな方向へ展示が向いている側面をもつと捉えられる。確かに、誰にもわかり・面白いことは必要だが、一方において「もの」や「こと」を考え、出来ればそれを「まとめる」ことを試みるという、博物館本来の教育－学習の側面を弱くしてはいないと思われる。

（3）最近の事例

最近展示替えをした館の例は里見（2009a）、糸魚川（2009b）などに見ることができる。その他の例を紹介する。

a. 戸隠地質化石博物館（長野市立博物館分館）

この館は以前戸隠地質化石館であったが、戸隠村が長野市と合併し、この機会に長野市立博物館茶臼山自然史館と統合して新しく2008年に開館した。建物は廃校となった旧柵小学校の校舎（3階建）を再利用したものである。この再生は館と東大総合研究博物館との共同によって構想され、実行された。一番の特徴は「ミドルヤード」というコンセプトを導入したことである。すなわち、展示室（フロントヤード）と収蔵庫（バックヤード）の機能を結合する場として設定され、ここで人（来館者）は資料と直接接し、親しむことができるのである。場所的には中間的な2階があてられ、「博物館体験室」と「化石クリーニング室」からなっている。

3階の展示室は前の時代の展示室と大きく替わり、地域の材料を使って次のように構成されている。1. 大型動物のいた長野（陸）、2. 海だった長野（戸隠の海）、3. 長野の大地の生い立ち（地質と化石）、4. 生命を育んできた地球の歴史（地球の歴史と生物進化）、5. そして長野の自然をみる（里山、豊かな自然）時間と空間を軸として、戸隠から始まって広がって行く展示である。

各展示室はかつての教室で、並列していて、順にたどってゆく形をとっている。この条件があるので、糸魚川（2009b）の考える“包括的”な形とするには難しい面があるが、それぞれの展示室を結んで関連付けることに、もう一工夫すればより包括的になったと思われる。しかし、資料も充実していて、かつ、手作りの良さが随所に見られ、楽しい・わかりやすい展示である（図7）。

「ミドルヤード」を、という発想がそもそも“包括的”という考えにつながることであり、展示に限らず後述する包括的博物館（活動）のひとつの形と考えてよいと思われる。地域と結びついた、

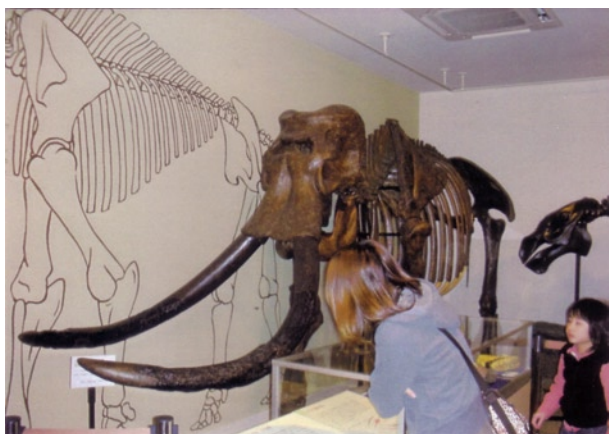


図7. 戸隠地質化石博物館。

Fig. 7. Togakushi Museum of Natural History.

この館の活動を見る限りそれは可能なことと思われる。

b. 福井県立歴史博物館

かつて、総合博物館であった福井県立博物館の自然史分野が福井県立恐竜博物館として分離独立した。残りの人文系部門がリニューアルして2003年にオープンしたのがこの館である。瓜生（2003）によれば、方針として、①モノ（実物資料）中心の展示、②感性に訴える展示、③フレキシブル展示、④見る人に身近な展示を置いたという。

展示は歴史ゾーン、トピックゾーンからなり、他にヒーリングコーナーとオープン収蔵庫がある。歴史ゾーンは時代的に排列されているが、通史的ではない。切り取ったいくつかのスポット

で構成されていて、展示方法としては新しく、面白い。オープン収蔵庫は裏方の公開に近いものである。

いくつかの、著しい特徴がある。①わかりやすい ②解説が簡明で理解しやすい ③パソコンと映像の利用が少ない ④ステイックである（参加型が少ない）⑤「もの」と「こと」があるが、その連結はない ⑥視覚的である ⑦収蔵展示 ⑧トピックゾーン ⑨現代的（今の展示の潮流）⑩スポット展示 などである。最初の狙いは成功していると思われる。ただ、展示相互の連結はなく（「もの」、「こと」がそれぞれ独立してある）、包括的とは言いがたい。

c. 大阪市立自然史博物館 新第5展示室「生き物のくらし」

一連の展示改装の一つとしての第5展示室改装は2007/2008年の2年にわたって行われ、完成した。「生態学」を基礎として構成されている。展示は 27. 種が違えば、生き方も違う 28. 果報は寝て待て 29. 新天地を求めて 30. 食う、食われる 31. 取り合う関係 32. 寄生と共生 33. 三角関係 34. 生き物が生み出すすみ場所 35. さまざまな環境を行き来する生き物 36. さらに遠くへ旅する生き物 37. つながって成り立つ自然 38. 人の暮らしとの関わり からなる。27～29は個体生態学、30～34は種間関係、35～38は生き物一環境を扱っている（図8）。

このタイトルだけでは理解できないと思われるが、身近にある里山を材料として、生き物同士、生き物と環境との関係を見ようというのである。展示は解説とゲーム中心のハンズオンで構成されている。解説は大人向き（なかなか難しい）、ゲームは子ども



図8. 大阪市立自然史博物館 生き物のくらし展示室。

Fig. 8. Osaka Museum of Natural History, exhibition room of Ecosystem.

向きということになるが、当然のことであるが両者の間にはレベルの差があり、乖離していて、子供たちがゲームによって生態学、あるいはその主要なテーマである生態系を理解できるとは思われない。生態学の中身は具体的であるように見えてもそこに内包される理論を博物館の展示で説明するのは大変難しい。

インタープリターは現在のところ用意されてない。また、見る側がどのように受取っているのか、の調査も行なわれていない。したがって利用者の反応が良くわからないので批評すべきではないかもしれないが、ゲームが面白いからやっている、なにか難しいことが解説してあるな、よくわからんな、などで終わっていたとしたら、折角の挑戦も残念な結果となっているといえよう。大変難しい実験であって、この難題を取り上げられた意気は評価で

きるが、率直に言って、成功しているとは思われなかった。

この館の展示替えは順番に行なわれていて、まだ完成していない。「進化」の部分が欠けているとことで、この展示室の、全体の展示の流れの中での位置づけはまだ見る事ができない。財政的なこともあるだろうが、全体の展示替えが早い時期に完結することが望まれる。

この館は研究・教育の両面において、活動的であり、市民との連携も強い。だからこそ、こうした挑戦的な実験ができるのであろう。

d. 豊橋市自然史博物館古生代展示室・中生代展示室

豊橋市自然史博物館は1988年に、市制施行80周年を記念して開館した(糸魚川, 1993)。エドモントサウルスの実物標本が目玉で、地球の歴史と生物の進化を主題としている。展示室は古生代、中生代、新生代の時代を追っての展示とガラパゴス、郷土の自然の5つの部門に分かれる。開館以来、郷土の自然展示室は拡張・展示替えが行なわれた。続いて「地球の歴史」をたどる3つの展示室の展示替えが計画され、古生代が2004年、中生代が2008年に実施された。その狙い、実際は西山(2004)、松岡(2008)に詳しいが、実見した結果を記述する。なお、古生代展示室の展示替えについては筆者も関係していたので、反省を含めての検討である。

新しい古生代展示室は生物の誕生、エディアカラ・バージェスなどの初期生物化石による導入、分類展示を主とする部分、2つのジオラマ(大森林の形成・デイトロドンの世界)からなる。導入部分は標本が少ないから多様な展示構成となっている。それ以後は分類展示となるが、それまでに収集(購入)された多くの化石標本を展示に利用することを目的の一つとして計画された。アイテムとしては軟体動物、節足動物、メゾンクリーク、腕足類などである(図9)。

展示のやり方としては大人向け(標本、文字・イラスト・写真など)と子供向け(4コママンガ、ハンズオン、背景画など)の2段展示となっている。全体的にはバランスが取れている。パソコンを使ったゲーム、チェックラリーなどは子供の来館者に大人気である。多様な技法が使われ、全体に明るくてよい。松岡は「分類や地質時代にとらわれず相互に関連付けた展示物群を配置した」として、これを「複合交差型展示」と呼んでいる。

空間的にみたととき、展示のアイテムが多く、やや混みすぎていることもあって、整理されていない感がある。資料が多く使われていることは基本的によいが、多いからよいということではない。

多いことはこれまで少ないと言われてきたことに対する反動と言えるかもしれない。分類展示という方法が基本的に良いかどうかには問題が残る。この展示は最近の展示の傾向(わかりやすい・楽しい・ハンズオンなど)と同調する方向にありながら、主とするところが分類展示であり、来館者、特に低年齢層の人たちがどのように理解し、問題を捉えているか、知りたい所である。松岡の言う「複合交差型」というのも実際にはよくわからない。導入部、分類展示、ジオラマが時代的配列として繋がらず、違和感がある。

包括的展示とするにはどうしたら良いか。すでに出来上がっているものについて考えることは大変難しいが、不可能ではない。具体的なコメントではないが、いくつかのポイントを考えてみる。

- ・アイテムの整理・選択
 - ・アイテムにウェイトをつける
 - ・資料の整理(質と量)
 - ・軸の選択(地球の歴史という点から言えば時間、副軸として空間一場)
 - ・技法の選択(静的・動的、例えば実物資料・パネル映像・音声・ゲームなど、カラーリングなど)
 - ・展示のレベルを複数にする(現在は2段である、3段ではどうか)
 - ・アイテム(グループ)を相互に関連付け、系統立てる
 - ・ストーリーを組み立てる
 - ・空間処理にグレードをつける
 - ・パターン化しない
 - ・インタープリターまたは音声ガイドの採用
- などである。

続いて改装された中生代展示室であるが、その前にエドモントサウルス(恐竜)の展示がある。以前は実物骨格標本だけであったが、他の標本資料・映像・イラストを加えて厚みが増した。

中生代展示室は基本的には古生代展示室の流れを継いでいる。ただ、アイテムが少なくなり、恐竜とアンモナイトが主役となっている。標本資料が展示の中心であることは変わらないが、マンガはなくなった。恐竜の展示は多くのレプリカ標本を初め、多くの資料を使って多層的に展示している部分と恐竜劇場(動刻を使用してドラマ構成—北九州いのちのたび博物館をはじめ各地の館に見られるパターン)からなる。骨格標本が増えたので迫力が増し、ドラマチックなショーは子供さんに人気であろう。

アンモナイトの世界は多くの実物標本を使っており、マス効果もあって見ごたえがある(図10)。その他、ゾルンホーヘン、生きている化石、ジュラ紀の植物、恐竜から鳥への進化、中生代アーカイブなどの展示がある。

以前の、この展示室にあったショーについては糸魚川(2009b)が紹介しているが、ドラマチックで中々よかった。包括的展示に



図9. 豊橋市自然史博物館 古生代展示室。

Fig. 9. Toyohashi Museum of Natural History, exhibition room of Paleozoic Era.



図10. 豊橋市自然史博物館 中生代展示室。

Fig. 10. Toyohashi Museum of Natural History, exhibition room of Mesozoic Era.

つながる芽をもった展示として評価できるものであった。ただ、面白さに関しては今度の劇場のほうがすぐれていると思われるが、本質的な「伝えること」がいまいになっていないかと懸念される。

松岡は中生代展示室についても「複合交差型」を意図したとし、さらに、古生代—エドモントサウルス—中生代の各展示室を結んでの「交差型複合」を試みたとしている。このように直接的でない、離れたアイテムをつなごうとするセンスはある意味で「包括的」につながることであろう。

展示の軸について見れば、時間の面では46億年前の地球の始まりから生物の誕生、その大爆発、多様化、植物の発展、動物の上陸を可能にした環境の変化と続き、人類の誕生から現代まで及ぶことである。空間（場）では海—陸—空、さらに宇宙空間にまで及ぶ。

展示室全体のつながりは包括的展示を構想したとき重要である。改装した2つの展示室を通じての流れを新生代展示室へ発展的につなぎ、さらにガラパゴス展示室の再生も含めて、郷土展示室まで通して展示を考えることがあろう。終わった2つの展示にこだわらず、たどりながら新しい方向へ向かうことが望まれる。そのときには地球史に見られる、「生まれる—変わる—発展する」すがた、すなわち地球・生物の進化を表現できるだろう。

e. オーストリアの2つの博物館

インスブルックはオーストリアのチロル地方の中心都市であるが、都心に2つの大きな博物館がある。チロル民俗芸術博物館と州立博物館フェルデナナデウムである。前者は宮廷教会と隣接しており、かつての修道院の建物が使われている。その名の示すように、この地方の民俗品・工芸品などを中心とした展示、移築復元されたこの地方の、地域差のある民家の部屋の展示などがある。州立博物館は先史から現代まで、この地方の工芸品・美術品（宗教美術を含む）・絵画などを展示している。それぞれ、個性を持っているが、共通して見られたいくつかのポイントをあげて、この国の博物館の展示の一面を見てみたい。

・古い建物 ・資料は豊富 ・新しい展示 ・展示の様式が新しい（アートの展示）（図11） ・英語（日本語はもちろん）の案内リーフレットがない ・音声ガイドが普通（ドイツ語のほか各国語のものがある、日本語はない） ・ラベルが少なく、簡単な説明だけ（音声ガイドが主のせい） ・写真のフラッシュは× ・照明が暗いことが多い ・サービスは十分でない ・来館者は少ない ・ショップ・レストランは小さい

これらのことは、博物館は「こうした形のもの」という考えが基礎にあることによるのではないと思われる。博物館は「あるべきもの」と考え、あって当然となれば、おのずとこういう形になるのではないと思われる。博物館が社会的に認知されている証拠であろう。

音声ガイドのことであるが、その後訪れたトラツベルグ城は1500年に建てられた城で、現在は城内を博物館として公開している。音声ガイドを使用（日本語もある）しながらの、ガイドに案内されての見学であるが、こういう場合はピッタリのやり方だと思われた。音声ガイドは演出があり、わかりやすかった。前の2館での音声ガイド利用も含めて考えると、この国ではこれが展示解説の普通のこととなっていると思われた。

f. 国立台湾博物館



図11. チロル州立博物館（オーストリア）。

Fig. 11. Tirol State Museum (Austria).

国立台湾博物館の2009年夏～秋の特別展のひとつに「蟲學與蟲藝」（図12）がある。蟲之學（昆虫の生物学）、蟲之藝（昆虫の藝術と文化）、蟲之樂（虫の鳴き声）の3つのアイテムからなる。昆虫は大きな分類群で種数が多く、人間生活とかかわりの大きい動物である。生物学の対象としてはもちろん、芸術（絵画、工芸など）のテーマとして扱われている。さらに、これは中国や台湾

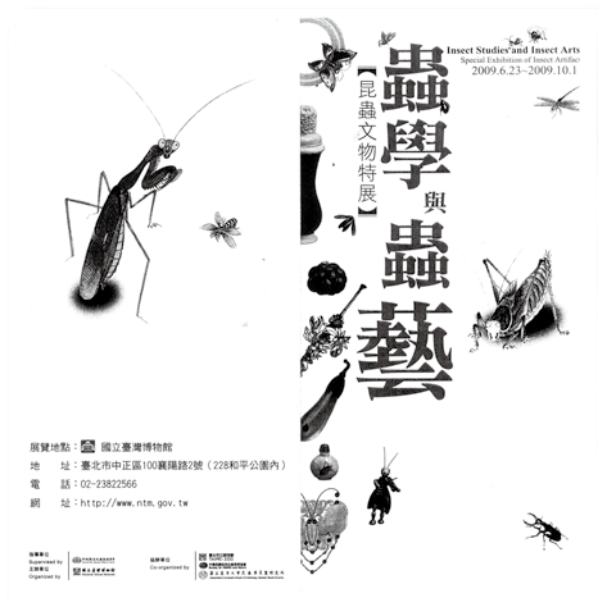


図12. 国立台湾博物館リーフレット。

Fig. 12. Leaflet of the National Museum of Taiwan.

で特徴的なことであろうが、虫の鳴き声を聞く文化がある。この3つをまとめて展示としたもので、ここでは自然科学と藝術、さらに人間生活（遊び）が一体となっている。異分野をつなぐ試みとして、包括的展示のベースであり、その萌芽ともいえるべきものであろう。

2) 包括的展示

糸魚川（2009b）はそれまでのいくつかの本・論文で議論した包括的展示の概念を提示した。基本的な考えをまとめ、ハード面・ソフト面の形を示し、いくつかの事例（生命の歴史・瑞浪市化石

博物館・三重県立博物館)をあげ、まとめを行なっている。未消化の部分があり、十分に整理されていない側面もあったので、新しい考えも加え、整理した結果が以下の項目である。前回のまとめの項目の順番の数字は各項の末尾に示してある。

(1) 考え方 (コンセプト)

- a. 「もの」・「こと」・「包括」, 「見る・楽しむ」・「知る・学ぶ」・「理解する・考える」の3つが基本要素である。
- b. 「つなぐ」・「まとめる」・「包み込む」が基本理念である。①
- c. ソフトとハードの面でバリアフリーである。③
- d. 「人と自然」―「人の暮らし」と「自然のいとなみ」が典型的な大テーマである。④
- e. 多様な, 多数の, レベルの違うアイテムを整理し包括する。⑤
- f. 放散的であり, 同時に収斂的である。進化する展示である。⑥
- g. 生態学における生態系に相当する, 博物館展示系である。
- h. 立体的ネットワーク (コンビネーション・ネットワーク・リンク・バラエティ) がある。
- i. 1～複数の軸を設定する。

(2) 展示の実際

- j. 展示に A, B, C の3つの類別 (内容・規模・難易についてそれぞれ) を設定する。⑩
- k. 1つの大きくない (1000 m²±が理想的) 空間, ときに2～3の複数空間 (～3000 m²) でシンプルな形をとる。⑦
- l. 動線をつくらない。
- m. 明るい, 単純な色彩構成とする。⑧
- n. 多様な展示手法を使用するが, 「もの」主体であり, 映像は多くしない。⑨
- o. 基本方針に基づいてつくられた設計にしたがって, 優れた

リーダーの下, 確かな技術を駆使して展示施工する。②

- p. インタープリター, 音声ガイドを利用する。

(3) 効果

- q. レベルに応じた対応があるので, 誰でも理解でき, 楽しく面白く利用して, ステップアップする。⑩
- r. すべての人に満足を与える展示である。⑪
- s. リピーターが増える (繰り返し見る)。
- t. 利用者に迎合するイージーな方向だけに向かない, 基本的な本来の姿勢を崩さない。
- u. 総合館・郷土館など, 複数の分野をもつ館に向けた展示である。
- v. ある部門, 2つの部門, 複数の部門とあらゆる形で構成できる。たとえば, 自然史系, 自然史系―歴史系, 美術系―自然史系などでも可能である。
- w. 企画展にも応用できる。
- x. 「考える」ことを知る (自分を, 自然を, 社会を)。

(4) さらに

- y. 博物館活動を包括し, 博物館全体を包括的にできる。
- z. 他機関, 他博物館との間にも包括的関係をつくりうる。「えこ」ミュージアムはその一つの例である。

前回 (糸魚川, 2009b) に示した事例について, さらに具体的に図で示した。図13は「地球の歴史」のアウトラインで, さらに細かく設定してある。図14は瑞浪市化石博物館の展示で, 前報の図15を, アイテムを挙げて具体的に示し, 関連させた案である。ややアイテムが多いので, 整理する必要があるかもしれない。図15は三重県立博物館の展示コンセプト (糸魚川, 2009b, 図16) を整理し・いくつかのアイテムを示したものである。三重県は自

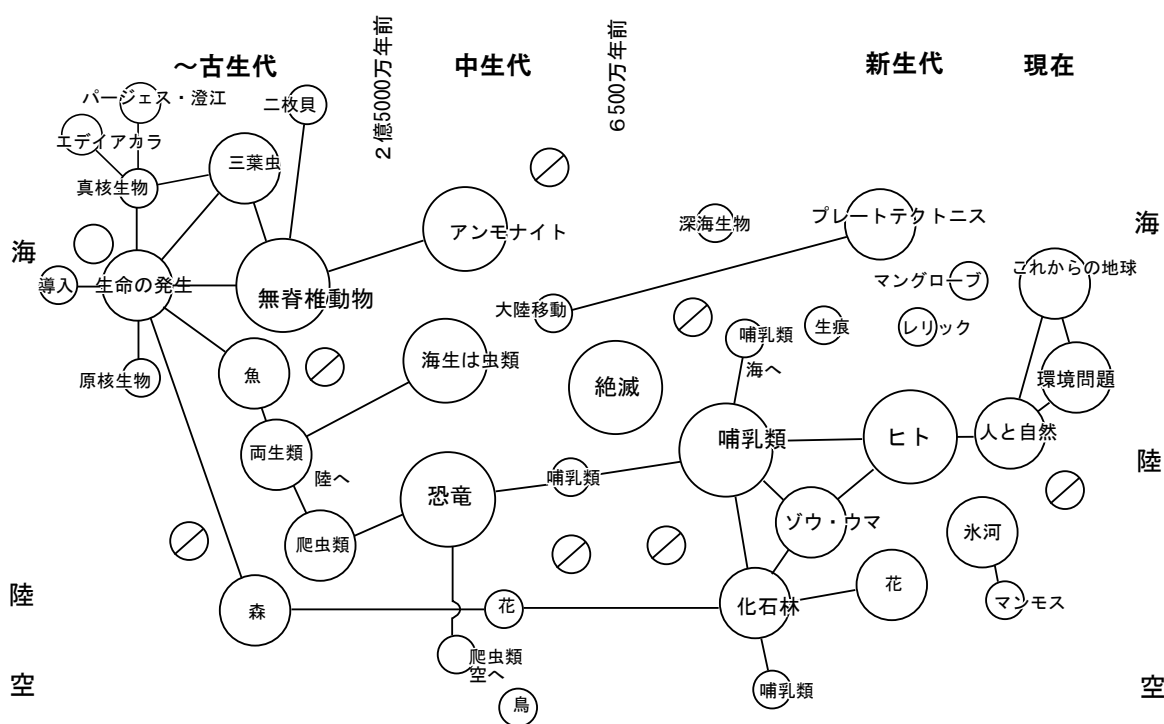


図13. 「地球の歴史」展示案。

Fig. 13. Plan of the exhibition of "History of the Earth".

35.9%である。約 1/3 が非常勤ということになるが、現在の博物館の状況から見ると、良いことではないがやむを得ない側面ももっている。常勤の館長には博物館内の人事、機構内の移動、天下り、お雇いなどがあるが、いずれにしろ、指導力、博物館についての知識・理解、行政力、経営力などが求められる。一般的にみて、もっとも妥当な場合は学芸員が経験を積んで力をつけ、館長に昇格するという例であろう。最近、このケースが多くなったと思われるが、戦後の博物館の発展がやっと地について、学芸員であった人たちが力をつけ、年齢的にも適格期に入ったことを物語っているのであろう。もちろん、このケースが絶対とも言えないし、他の実力をもった人材がないわけでもない。実際にそのような例もある。

先日、千葉県立中央博物館開館 20 周年記念シンポジウムとして「自然史博物館のこれから」が開催された。国立・県立・指定都市の、大型自然史博物館の館長またはそれに次ぐ位置にある人々によるシンポジウムで、各館長はそれぞれ自館の目指すところを語られた。各館は個性的であり、その活動も多様であるが、現在における博物館の意義を十分意識した発言が続いた（千葉県立中央博物館、2009）。

このように、力のある大型の館の場合はしかるべき館長の存在があり、博物館が機能していると思われる。問題はそうでない、中小の館の場合である。博物館についての認識が薄かったり、昔から言われている“博物館行き”、あるいはお雇いの人事だったり、兼務であったりしたらどうであろうか。こうした場合には確かな博物館活動が保証されるとは思えない。館長職の問題に限らず、多くの事柄について中小の博物館は危機的な状況にあり、生き残りをかけているといっても過言ではない（荻野、2009）。理想的博物館長像を求めて、それぞれの条件下でどうあるべきかを考え、努力することが必要である。

博物館長の位置づけについてのべたが、博物館、そしてその活動に関して共通する問題は多い。現在は、現状を確かめ、これからの方向を考えてみる時期であろうと思われる。

2) 博物館の評価

評価 (evaluation) はある事象について測定・解釈し、価値を決め、より高い目標にたどり着くよう、試みることである。また、近い言葉に認定 (accreditation) があり、これは基準と比較してものごとの位置を認定することである。評価には絶対評価と相対評価の 2 つがあり、前者は非常にむづかしい判断で、ありえないとする考えもある。相対評価にはいくつかの方法があり、それは基準に対しての評価 (accreditation)、時間をおいての評価、目標をおいての評価、他との比較などがあり、普通はこの相対評価が行なわれている。

評価にはいわゆる 5 w 1 h がある。博物館についてみると

- ・何を (what) 館自体 館の活動 学芸員の活動
- ・誰が (who) - 1 博物館 (自己評価) 行政組織 (設置者・議会) 他館・ネットワーク (相互評価) 協会などの組織 (他者評価) 来館者 (利用者)
- ・誰が - 2 個人 複数者 委員会
- ・いつ (when) つくるとき できたとき 複数年後
- ・どこで (where) 館内 博物館 社会・地域
- ・なぜ (why) 役割を果たす 向上のために 機能的であるために 活動的であるために

・どのように (how) 科学的・分析的 基準の選定 (ウェイトをつける?) 基礎データの選定 (年報・データブックなど) 世間的・感覚的・情緒的 (おもしろい、つまらない、見ごたえがる、ユニークである) である。

ここでは基準、博物館の使命と役割、評価の目的がなにかなどを明確にしておく必要がある。

糸魚川 (1999) は自然史系の 5 館について博物館活動の評価をしている。県立、指定都市、中核都市、市立 (総合)、町立の館について、16 の項目を選び、A、B、C のウェイトをつけ、点をつけ、そのトータルを計算し、さらに 100 点に換算している。69.7 ~ 53.3 の間の点数になり、規模、立地、年数などを考慮して判断すれば、これらの 5 館の活動はレベル以上であると結論している。ただ、この評価は客観性に欠ける憾みがあり、より確かなデータに基づいた基準を作り、多数者 (例えば委員会など) による評価を行なうことが望ましいとしている。

(1) 外国の博物館評価

a. イギリス 博物館登録制度 (registration) があり、1988 年から博物館・美術館委員会 (MGC) により登録が行なわれている。約 2500 館の約 70% が登録または仮登録されている (1996 年で約 1700 館)。助成を受ける資格が得られるため多くの館が登録を受けられるよう努力している。この制度は必要最低基準 (minimum standard) の達成を求めるものである (博物館基準研究会、1999)。その後、認証 (accreditation) 制度ができ、博物館・図書館・文書館委員会 (MLA) によって行なわれている。小規模博物館も含み、認定は 5 年ごとに更新される (日博協、2009a)。

b. アメリカ 博物館協会 (AAM) による基準認定事業 (Accreditation Program) が 1971 年から行なわれている。より高い基準 (higher standard) を目指すもので、8000 館の約 10% が認定されている (博物館基準研究会、1999; 守井、2003; 日博協、2009a)。

c. ドイツ ドイツでは博物館評価は連邦レベルで進行中であるが、具体的には明らかではない。状況に応じて方法が適宜考案され、民間に先導的な動きがある。まだ評価が定着しているとは言えない (ノイマン・川嶋、2002)。

d. フランス 市民の博物館利用状況を調査する試みが 1991 年に博物館総局から出された。ランダム抽出により質問表 (6 つの観点に立つ) を渡し、回答を求めるものである。100 以上の館が参加している。利用者のニーズを知り、方向を探る基本情報として活用されており、ある館では評価に関する専門部門を設置している。以前の企画・特別展だけでなく常設展示への関心が大切ということも再認識されている (ノイマン・川嶋、2002)。

e. オランダ イギリスの登録制度をモデルとして 1998 年より登録制度が始まっている。各県にある博物館アドバイザーが登録を勧誘し、オランダ博物館財団にある登録審査委員会が審査している。登録要件としてコレクションがあることが条件で、動物園や科学館は対象とならない。審査は 5 年毎に行なわれ、無料である。約 1200 館のうち 450 館が登録を受けている (日博協、2009a)。

(2) 日本

日本では戦前から展示の効果についての評価などがあったが本格的に評価が取り上げられたのは戦後のことである。1950 ~

1960年代には展示効果や集客・経営についての調査があり、その後、外国の例などを倣っての評価が始まった。1990年代後半に日本ミュージアムマネジメント学会が生まれ、経営についての評価も行なわれるようになった(牛島, 2002)。

日本の場合を中心に、博物館の評価については以下のようないくつかのまとめがある。

- ・特集「博物館の評価」, ミュージアムデータ, no. 4, 1988.
- ・特集 博物館の評価, 全科協ニュース, 31 (6), 2001.
- ・「博物館の評価について」アンケート調査結果報告, ミュージアムデータ, no. 54, 2001.
- ・シンポジウム「今後の博物館評価のあり方」報告書 平成13年度 日本博物館協会, 2002.
- ・アメリカ・イギリスにおける博物館評価の状況に関する報告書 平成14年度 日本博物館協会, 2003.
- ・特集号「博物館の評価」, 博物館研究, 38 (5), 2003.
- ・「第三者的な立場から博物館を評価し、格付けする試み」文環研レポート, no. 28, 2009.
- ・博物館評価制度等の構築に関する調査研究報告書, 日本博物館協会, 2009.

評価項目に関しては伊藤(1991)の博物館チェックシート、糸魚川(1999)の「博物館の検証」、丹青研(2001)の評価指標などがある。

(3) 博物館展示の評価

博物館の評価のうちで、展示を評価することはわかりやすい、結果が得やすい、結果を利用しやすい、各種の評価ができる、などの利点があり、特に利用者が評価できるという点で意味がある。展示評価のポイントは ①来館者とのコミュニケーションができているか ②メッセージを伝えることができているか ③来館者が理解できているか などである。

滋賀県立琵琶湖博物館は展示評価のワークショップを行ない、その結果をまとめている(琵琶湖博物館調査研究報告, 2000)。基本的な問題提起(アメリカの展示評価の各種資料、たとえば評価の種類と使われる段階、調査の方法、質問の方法など)が挙げられ、実例が示されている。

江戸東京博物館の調査票を用いたアンケート調査では人が対応しないと回収率が10%であったのに、説明し記念品を渡すことにより90%になったという。結果として、リピーター率が約30%であること、団体は小学校6年生が多いこと、関西の人は少ないこと、予定した観覧動線が利用されていないことなどがわかり、改善の要望や提言(動く展示がよい、休む場所が欲しい、メリハリをきかす など)もあった。

効果として現状把握ができたこと、スタッフ同士が議論しやすくなったこと、常設展示の評価が各種階層によりできたことなどがあげられている。初期段階の総括的评价であるとの認識から、対象の拡大・他の事業への拡大が期待されるなどの将来の展望ができたという。

琵琶湖博物館では博物館を評価する視点に立ってワークショップとシンポジウムが開催された。アメリカの方の講義のあと、参加者が3班に分かれてC展示室で動線調査などをし、その効果を検討した。平面図に動線と止ったところを記入し、中心にある環境展示への入り込みを調べた。モックアップ、ローピング、パネルの追加により入り方・入る人の数をチェックした。そして、メッ

セージの伝わり方を比較し、結果を確認した。

結論として、製作途中評価ができた 攻撃的な手法であった この方法は目的がはっきりしているときに有効である いろいろな可能性が示された という。

この報告の中で、西野(2000)はここで示された展示評価について次のようにコメントしている。

- ・総括的な評価だけでも成果がある
- ・メッセージの伝達、教育効果が目目である
- ・改善のための具体的な指標が得られる
- ・自己評価につながる
- ・展示評価をルーチン化するとよい

本論の一つの主点である、包括的展示の評価がどのようになされるかはまだ見えていないが、見る側のレベルと階層を設定し、それに対応する展示を提示するのであるから、多少複雑にはなるがそれに見合った評価方法があろう。そして、展示の評価は包括的博物館を評価する手がかりとなるであろう。

3) 独立行政法人制度

行政改革の一環として、国立大学・国立研究所・国立博物館などが2001年4月より独立行政法人となった。博物館への適用の概要は中根(2000a, b)、栗原(2001)などに示されているが、要点を挙げると

- ・基本的な考え—ソフトなやり方で質の高いサービスを提供する
- ・独立性をもたせる
- ・役員は大臣が任命する
- ・大臣が中期目標を示し、法人が中期計画をつくる。計画に従って業務を行い、終了したら評価を受ける
- ・企業会計的な会計制度である
- ・国が企画し、法人が実施する
- ・採算性が乏しいので事業経費は国が補償する
- ・職員は国家公務員とそうでないものとに分かれる
- ・3～5年ごとに外部評価をする

この制度により、国立博物館・美術館は国立博物館(4館+2つの文化財研究所)、国立美術館(5館)(以上文化庁所管)、国立科学博物館(文部科学省社会教育課所管)と形を変えた。

最初に中期目標が5年と設定されたので、すでに最初の計画期が終わり、2度目の中期計画の時期に入っている。博物館・美術館の活動が多様になり、活気が出て、入館者も増加し軌道に乗っているように見えるが、いろいろ問題もあるようである。

例えば、経営努力をして自己収入が増えると、新しい中期計画の「自己収入予算額」(ノルマ)が前の自己収入の平均で定められ、大きくなる。逆に「運営給付金」は減額されることになった。また、剰余金が出た場合、その「儲け」は「目的積立金」として使用できる、一種の報奨金であるが、2002年度までは認められたが2003年度は前年度を下回ったとして認められなかった。経営努力をしても報われないことになる。さらに、これらの独立法人は新5年間で一般管理費は15%、事業費・人件費が5%削減されている。努力の効果が無いというのは辛いことである。

西野(2001)は独立行政法人化に関連して、これからの時代の博物館の向かうべき道として2つの事項をあげている。すなわち、「百策連環」(諸制度を包括的かつ相互連関的に運用する)と「原点への回帰」(博物館が商業的な施設でなく、非営利的な施設であることの再確認)である。包括的博物館につながる考えとして

注目される。

次に述べる指定管理者制度の問題を解決する一つの方法として、独立行政法人制を地方に適用することの検討が大阪市などで行われている。不況下での地方財政は厳しい。法人化しての収入源が「運営交付金」に大きく依存していることを考えると、現実として可能であるか疑問である（高橋，2009a）。

4) PFI と指定管理者制度

PFI (Private Finance Initiative) は民間資金を活用して公的施設の建設・運営をする方法で1987年にイギリスで始まった。日本でも1999年にPFI法ができ、適用が始まった。

自治体・国が企画立案し、民間と契約し、契約料を支払う。民間は設計し・建設し・維持管理をする。官は監視をするというシステムである。質の高い公共サービスを提供できるというので採用が始まったが、必ずしもうまくゆかず、収支が悪かったり資金繰りに困ったりして、契約解除の声さえも起こっている。

イギリスではさらに進んでPPP (Public Private Partnership) が生まれた。PFIには「官が民を利用する」色彩があるが、PPPは「官と民がお金だけでなく、対等の立場でさまざまな面で協力して公共サービスをする」というものである。ここでは「真に意味のある社会資本とはなにか」、「公共サービスとはなにか」を問う意味があり、時代の流れに沿った方法といえよう。

指定管理者制度は構造改革路線に沿って自治体の公的施設の管理・運営に民間事業者・NPO法人などが参加できる制度で、対象となるものはホール・公民館・スポーツ施設・図書館・福祉施設など多様で、博物館も含まれる。サービス向上と経費削減がねらいで、2003年の地方自治法の一部改正によりスタートし、現在までに多くの事例が生まれた。

今までの管理委託は自治体が財団などの公的団体と管理委託契約をし、財源を確保し任せるものである。指定管理者制度は自治体が条例をつくり、業務の範囲・管理の基礎をつくり、選定委員会を経て議会で議決する。公募し、指定管理者を選び、期間を決めて指定するというものである。

博物館についてのこの制度を見ると、五十嵐（2005）によれば、2005年5月において、調査（711館）で回答のあった435館中、指定管理者制度を導入した館は12館で2.8%、導入が決まっている館が16.1%、検討されている館が21.1%、予定のない館が47.4%である。この制度を選択すべきか否か、迷っている・様子を見ている状況がうかがわれる。導入した12館では委託期間は2～5年で、5年が半数以上を占めている。現在までに4年以上の時間が経過しているから、増加していることは間違いないだろう。地方で見る限り、ホールやスポーツ施設などの場合は雪崩を打ってこの制度を採用しているように見える。

一つの事例を挙げる。世界淡水魚園水族館（アクア・トトぎふ）は岐阜県各務原市川島にあるテーマパーク「河川環境楽園」内にある。延べ床面積約8400㎡、魚類・両生類など約220種25000点、植物約40種3500点を飼育・展示している（2005年現在）（図16）。

この水族館は岐阜県と三菱商事が100%出資する（有）ジー・エフ・エーとの間のPFI方式でつくられ、岐阜県は30年間のリースで施設を借り受けている。

さらに県はこの水族館を運営する指定管理者として（株）江ノ島マリンコーポレーションを選び、管理運営などの経費を入館料

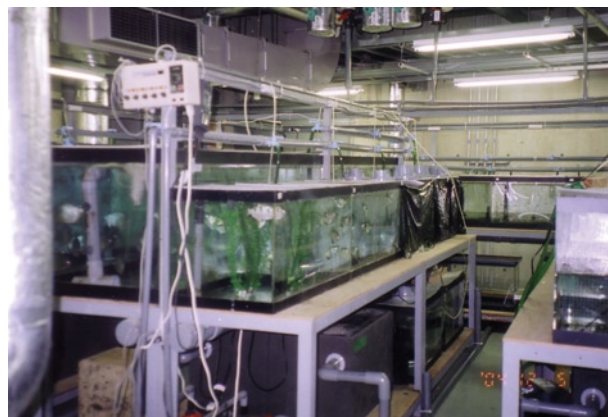


図16. 世界淡水魚園水族館。

Fig. 16. Gifu World Fresh Water Aquarium.

などの独立採算でまかなう方式を導入した。指定期間は30年で、利潤が上があれば県へ納め、赤字のときは補填しない方式である。この館の場合は水族館であり、生物を飼育するという特別な条件があるので、管理者はおのずと限られる。江ノ島マリンコーポレーションは新江ノ島水族館などを運営する実績をもち、選ばれたものであろう。30年という期間は少し長すぎる感があるが、活動が継続したほうがよいという、特殊な場合として適当なのかも知れない。むしろ問題は利潤が上がらないで、破綻した場合である。伺い知るところ順調なようであるので、期待したい。

実施以来5年以上たち、早い場合は更新というケースが生まれている。博物館についても様々な報告がある（寺西，2005；山本，2005；森本，2005；南山大学大学院人間文化研究科（編），2006；日博協（編），2009a；丹青研，2001；前沢，2006；雪山，2007；篠，2008；藤，2008；佐久間，2009；高橋，2009b）。

現在、指定管理者制度を導入した博物館には2つのタイプ（A，B）がある。Aは博物館の機能のすべてを任せるとして、その代表的な例は長崎歴史文化博物館である（いわゆる長崎方式）。長崎県と長崎市が共同で新設した博物館である。2005年11月に開館したが、指定管理者として（株）乃村工藝社（大手の展示業者）が選ばれ、すべての業務を引き受けた。館長・学芸員も含めてである。指定期間は5年間である。新設で既設館よりの引継ぎがなかったこと、館長適格者を用意できたことでこの形が誕生したと思われる。

Bは島根方式（島根県立古代出雲歴史博物館など）で、島根県の美術館・博物館などで採用されている。この場合、県が行なう業務があり、事業計画、博物館経営、学芸業務がそれにあたる。したがって館長・学芸員は県職員ということになる。指定管理者はその他の業務、すなわち観覧料の徴収、施設設備の維持管理、利用促進を分担する。これにはやはり展示業界大手の（株）丹青社が参加している。ただ、地元の参加が求められているので、一畑グループと共同であり、近畿日本ツーリストも一員である。

多くの指摘があるように、指定管理者制度を博物館に適用することには問題がある。第1に非営利性をもつ博物館に営利を目的とする民間機関が関わることの是非、第2に公共性が保てるかどうか、第3に活動の継続性の問題である。2つの形にはそれぞれ適否があるだろう。Aの場合にはいわゆる学芸活動（学術・研究、教育・学習、展示など）が十分にそして円滑に進められる

だろうか、力のある館長・学芸員が民間機関に常に用意されているだろうか、指定期間が終わったときの雇用の問題はどうか、などの問題がある。Bの場合は行政側(学芸員など)と民間側(職員など)の連携がうまく行くかということがある。

指定管理者制度は基本的に博物館になじまないということが一般的に言われている。上に述べたように、確かに整合性に乏しい側面があり、少なくとも館長・学芸員といった博物館の本来の活動に関わるスタッフは公で用意すべきではないかと思われる。しかし、すでにスタートして、多くの事例がある以上、これを否定していても前進はない。時間的にもう少し結果の出るのを待つということもあろう。模様眺めの気配ももう終わりに近いだろうから、対応を迫られる場合もあろう。少ないだろうが、各種の事例をよく研究しての、確かな対応が望まれる。

8. 博物館と社会

このことについても糸魚川(2009a)においてふれた。現在のテーマを加えて再論する。

1) 博物館と市民

(1) 日本の社会

戦後60年以上をへて、日本は国際的な地位が確立し、民主主義が行き渡ったように見える。豊かさが言われていたが、昨今は国際的な問題と関連して経済の不安定が生まれ、格差の拡大、失業者の増大など、さまざまな問題が生じている。政権が交代して、社会がこの先どのように変わってゆくか、まだ見えない状況にあるが、博物館との関連でいくつかの問題を考えてみよう。

生活: ゆとりがなくなって、市民は様々なレジャーを楽しむのに、たとえば「安近短」を選ぶといったような現象が生まれている。このことに関連して、博物館の利用は増加するように見える。逆に高速道路の低料金化は遠出するきっかけになるかもしれない。

経済: 利潤追求がすすむ中で、企業にも格差が生まれ、かつての財閥のような形は見えなくなった。企業メッセも維持できるほどの勢いはなく、博物館界にも影響している。

教育: 少子化が進む中で学歴尊重の傾向が強く、子供たちは進学競争に当面し、受験以外の学び・遊びの余裕がなくなって来ている。一時声高に唱えられた「総合学習」も勢いが無い。朝令暮改の教育政策もあって博物館にとってプラスの時代ではない。

文化: 経済のしわよせはまず、文化の面に現れる。確固たる方針もなく、文化についての「グランプロジェ」(フランス)は日本では期待できない。そんな中で昔から博物館はマイナーであり続けている。

IT: 異常なほどの速度で進歩している。便利さ・経済性・国際性などをもっていて、博物館のみならず日常生活においてこれ無し社会は考えられない。

日本人: いろいろな特質をもっている。例えば、まね上手 新しもの好き 劣等感と優越感 高い文化の熟成度? 優れた文化的センス? 中流意識 お金第一 など

欧米との違い: 歴史 気質 価値観 宗教観 資料の質と量 余暇の考え

(2) 市民の姿

博物館の利用(Mであらわす)を含めて、ゆとり・遊びなどの他、暮らしの中の市民の姿を階層別に見てみると

児童: 学習→レベルアップ? ・総合学習? -M ・遊び→TVゲーム マンガ テーマパーク 虫・フィギュア

中・高生: ・受験・遊び・ホビー-M???

大学生: ・就職 ・遊び-M??

成人: ・仕事 ・遊び→居酒屋 スポーツ ギャンブル・家庭サービス-M ・学習-M

高齢者: ・時間とお金がある ・何をするか ・今までの埋め合わせ ・学習意欲がある(新しい発見をする)-M ・外へ(山歩き ハイキング 自然への興味 写真 スポーツ 歴史旅行など)-M ・内へ(お絵かき 歌・句 園芸など) ・地域のグループで学習-M ・ボランティア-M

博物館は基本的には主たることではない。「ゆとり」のあるとき、「あそび」のとき、「気まぐれ」のときなどに利用することが多い。しかし、最近ではもっと意欲的に博物館活動に参加しようとする動きがある。

(3) 博物館の対応

最近では「開かれた博物館」ということが言われ、活動の形が変わってきた。いろいろの学習活動はもちろん展示にも参加体験型が多くなり、単に見るだけでなく、触る・参加することが多くなってきた。博物館は人材養成に努め、一緒に活動する、協働ということが言われるようになってきた。特に地域にある博物館としては欠かせないものとなって来ている。

新しい試みとしての「恢復法」は愛知県北名古屋市歴史民俗資料館はじめ各館で取り入れられている展示法である。ある時代(例えば昭和30年代)に限った展示構成をし、その時代を生きた人々に「なつかしい」、「思い出す」、「あの頃は」の感情をもってもらい、それをきっかけに「ゆっくり」、「落ちつき」、「みんなと一緒—孤独でない」など、「いやし」の効果を挙げようとするものである。一般にこうしたレトロの展示は高齢者には「懐かしさ」を、若者には「珍しさ」を感じさせるものとして捉えられている。

(4) 市民の対応

- ・学習・いろいろな活動: 学習会、採集会、友の会 など
- ・ボランティア(インタープリター、研究援助)
- ・踏み込んで 展示づくりに参加、活動のリーダーに、一日(一月、一年)学芸員に、
- ・コレクションをつくる(ミニウム・マイミュージアムなど)・寄付する

(5) 博学連携

博物館と学校が協力しての活動で、1990年代前半の、学習指導要領の改正に伴い、「総合学習」が言われ始め、盛んになって来た。地域に密着した活動を目指す地域博物館にとっては当然の活動のひとつである。

典型的な、優れた例は岐阜県的美濃加茂市民ミュージアムである。開館以来の、博物館・学校・市民の協働による活動状況は目覚しく、その内容は可児(2009)にくわしい。この活動に参加して博物館を知った子供たちが博物館を楽しみ、自ら博物館を利用しようとしていることは大切なことである。こうしたことから博物館の展示を理解し、進んで地域についての知識を深めることになるのである。この子供たちが成長して親になり、子供と一緒に博物館へ来ることが起これば、まさに地域全体の成果と捉えられる

ことができるだろう。

愛知県の一宮市博物館の活動も目ざましい（久保・宮下、2006）。この館は1987年に開館したが、1991年から「くらしの道具～今と昔」展を開催し、それと連携して全市の小学3年生（現在は4年生）が全員来館する。解説書をはじめとした資料があり、体験を伴ったレクチャーがあり、さらに日曜日には家族連れでの「体験」がある。いろいろなかたちで博物館と学校の生徒とがかかわり、最終的には「ミュージアムキッズクラブ」と呼ぶ組織ができるまでになった。裾野が広がって博物館が“大きくなる”，そんな活動である。このことは、学芸員はもちろんのこと、多くの協力者の献身的な努力があって初めて実現したことである。

2) 社会活動

現代は博物館がその活動（研究・教育の両面）において、市民の利用を待っているだけでなく、自ら乗り出し、仕掛けてゆく時代であろう。そして、その活動はこれまで行なわれてきた本来の活動を超えて広がってゆくはずである。その内のひとつが自然保護・環境問題で、すでに糸魚川（1999）において論じている。保護活動は自然だけでなく、文化遺産・産業遺産にまで及び、調査・発掘・保存が行なわれている。その範囲はかつて考えられていたより大きく拡がり、人間の暮らしの中で失われ・変えられた自然はもとより、人間が作り出したもの・利用したものに及んでいる。最近、各地で保存・活用が問題とされている「里山」はその典型的な例で、生活の変化によってその意味が変わってきたもので、いまや日本における、自然と人間の協調を物語る大切な遺産である。

保護とは逆に開発の面での対応もある。いろいろの事情で、最近の開発はひとところほどではないが、人間活動が多様になり、形を変えた開発が進行している。地域についてのさまざまな情報は博物館に多く蓄えられている筈である。博物館がこの情報を発信しない手はない。と言うより、発信する事が求められていると言えよう。

自然災害についても同様である。諸科学の進歩によって災害に対する知識が増え、さまざまな対応が行なわれている。自然条件（地形・地質・気象・植生など）を研究・調査し、その情報を蓄積し・さらにそれを災害防止に役立てる事はできるはずである。そこには行政・大学などの研究機関との協働があるが、博物館にはさらに市民との協力、市民へのわかりやすい、具体的な知識の普及という責務があろう。

「自然」、そしてその中に組み立てられている「人間の暮らし」、
「自然と人との関係」は博物館のもっとも重要なテーマであることを認識し、社会における活用を考えるべきである。

3) 博物館と環境・観光・健康

この3つのアイテムは日本のみならず世界的に見ても現在のテーマで、博物館としても取り上げる意味のある事と思われる。

(1) 環境

「環境と博物館」についてはすでに論じたことがある（糸魚川、1999; 糸魚川、2009b）。社会的な大きな問題であり、いろいろな形でとりあげられている。糸魚川（2009b）には環境展示のキーワードが挙げられているが、同時に環境問題のキーワードとしても通じることでもあるので再録する（表4）。

このような多様なアイテムがあり、身近なことからグローバルな問題まで、人間生活に直接関連するので、博物館の主要なテ

表4. 環境問題のキーワード。

Table 4. Key words of environments.

A レベル	B レベル	C レベル
環境	自然	海 大陸 島 平野 丘陵 山岳 高山 氷床（氷河）砂漠 熱帯 温帯 寒帯 極 植生 生態系
	人	国 先進国 途上国 人口 産業
環境問題	地球規模	温暖化 オゾンホール 酸性雨
	日常	ゴミ 排水 排熱
	公害	大気汚染 水質汚染 放射性 廃棄物 鉱害 薬害 地盤沈下 伝染病 砂漠化
	災害	台風 竜巻 集中豪雨 ひどい 地震 火山爆発 土砂災害 虫害 断流
自然保護	生物	絶滅 絶滅危惧 侵略 生態系 の混乱 種の保存
	人の作用	狩 飼育 栽培 略奪 遺伝子操作
その他	資源問題	化石燃料 希金属 水不足
	食糧問題	食糧不足 バイオエネルギー
	人口問題	飢餓 過密 生活環境 強制移住

マとして扱うことができる。

環境（問題）と博物館のかかわりは次のように整理される。

a. 博物館のあり方として

- ・環境をテーマとした博物館
- ・フィールドを伴う博物館
- ・フィールドと博物館（自然公園とビジターセンター）
- ・エコミュージアム

b. 博物館の活動として

- ・研究：調査・研究，資料の保存，データの蓄積
- ・教育：知識・考え方の学習，体験，人の養成
- ・展示：環境，環境問題，自然保護 など
- ・社会活動：情報の受信・発信，データベースの作成，自然の保全

c. 展示

環境についての博物館展示は多岐にわたる。現在の自然環境，自然保護，環境問題，人と自然のかかわり，古環境・環境変遷（人類紀，地質時代）などがある。自然史系博物館だけでなく，人文系（歴史系）博物館にも及ぶことである。

主に自然関連の博物館の環境展示の事例を挙げる。

i. テーマ展示（複合的）

- ◎国立科学博物館 ・日本人と自然（縄文人・弥生人，稲作など）
 - ・地球環境の変動と身近な生物進化（古環境，人類）
- ◎千葉県立中央博物館 ・自然と人間のかかわり
- ◎神奈川県立生命の星・地球博物館 ・自然との共生を考える
 - ー人類の現在と未来ー
- ◎埼玉県立川の博物館 ・荒川とひとの暮らし（参加体験）
 - ・川と人の文化（展示）
- ◎国立生物多様性センター ・日本の自然 ・世界の生物多様

性 ・自然の環境 ・保全調査研究 ・保全のとりくみ

◎名古屋市科学館 ・環境—明日の地球（生物館 参加型）

◎大阪市立自然史博物館 ・身近な自然（第1展示室） ・自然のめぐみ（第4） ・生態系（第5）

◎兵庫県立人と自然の博物館 ・人と自然 変遷（縄文時代のヒトと自然，森の変遷など） 調和と矛盾（都市化の問題） 警鐘（人類の活動と野生生物の絶滅など） ・新しい文化
・暮らし ・共存 ・提案

ii. 総合展示の一環として

◎福島県立博物館 ・自然と人間（平野と盆地，高山，火山と湖，川）

◎茨城県自然博物館 ・人間と環境（ランドサット，ハイロミズナギドリの胃の内容物，未来へ向けて）

◎徳島県博物館 ・徳島の自然と暮らし

◎群馬県立自然史博物館 ・かけがいのない地球

◎牛の博物館 ・牛とヒトのかかわり

◎豊橋市自然史博物館 ・第四紀 ナウマンゾウ狩のジオラマ
・汐川干潟の一日 映像とナレーション

◎宮崎県総合博物館 照葉樹林（自然）＋古代人の猟（歴史）

◎大英自然史博物館 ・地球ギャラリー 火山 地震

◎アメリカ国立自然史博物館（スミソニアン） ・アイス エイジ（氷期）

◎デンバー自然史博物館 ・先住民の暮らし（ジオラマ）民族展示

◎ページ博物館 ・古環境復元（ジオラマ） ・古生態展示（屋外ジオラマ）

iii. 包括的展示

◎フランス国立自然史博物館 ・アフリカのサバンナ ・フランスの動植物と自然保護 ・北極と南極 ・サハラ砂漠
・家畜化 ・猟と漁，収穫 ・移動と移植 ・景観の変換
・複雑化 ・現在の地球

◎滋賀県立琵琶湖博物館 ・C展示室 湖の環境とヒトの暮らし

iv. 古環境の復元（資料・パネル・イラスト・ジオラマ）

◎瑞浪市化石博物館 豊橋市自然史博物館 美濃加茂市民ミュージアム（図17） 北九州いのちのたび博物館 など

v. 環境問題

◎北九州環境ミュージアム ・北九州の変遷 ・公害克服の歴史 ・都市と地球の環境問題 ・環境技術とエコライフ
・環境都市をめざして ・交流スペース など

博物館における環境関連の展示を見ると，内容の多様性もあって，レベルがさまざまで，難易度のちがいが，わかりにくいことなどがあり，一般的に見て展示として万全でない館もある。まとめると

- ・一般論は面白くない 具体例はわかりやすい
- ・マイナスのことは展示しにくいので避けていることが多いが，積極的に提示すべきである
- ・「人と自然」はこれからの主要なテーマである
- ・ローカルからグローバルへの拡大
- ・ジオラマ・パネル展示より映像・音声を利用する
- ・ひき付け，解説し，体験してもらう
- ・「えこ」ミュージアムは新しい形としてある となろう。

博物館での環境（問題）についての要点には次のようなことがある。

- ・博物館の基本的な活動をする（収集，調査・研究，教育—学習，普及，展示，情報，社会活動など）
- ・環境教育，自然保護，種の保存などの活動
- ・負の遺産も提示する
- ・博物館の枠を超えた活動をする
- ・包括的展示，包括的活動を試みる
- ・ビクターセンターの充実
- ・環境関連博物館のネットワーク
- ・コアとなる博物館を国立レベルでつくる
- ・生物館・園の新しい発展を試みる
- ・エコミュージアムの正しい発展を目指す

（2）観光

観光資源の内，博物館と関連するものは博物館のような文化施設，自然環境，文化遺産，世界遺産，景観などがある。寺社の御開帳・出開帳は江戸時代からあるお宝拝見であり，ある意味で博物館的行為である。明治に入ってから博覧会は博物館と共通する面をもっていた。1934（昭和9）年発行の「博物館研究」7巻9号は修学旅行特集で，東京初め全国，そして当時植民地であった台湾や朝鮮まで含めて博物館をリストアップしている。修学旅行は学習で観光ではないが，当時の博物館事情を考える上で参考になることである。

伊藤（1978）は博物館の目標別分類の3つの型のひとつに観光志向型（利用者のフィードバックを求めない—利用のみ）をあげ，また，伊藤（1991）では第一世代の博物館として，保存中心の館を上げ，利用の形態として娯楽・観光をあげている。

戦後，博物館は急速に増加したが，その中で私立美術館，科学館，動物園，水族館などの設立が目立っている。これらは博物館が広い意味での観光の対象となり，企業として採算が取れることも可能であったことを意味している。同時に，昔からの“見世物的”な側面（企画展・遊園地化など）が拡がることにつながった。

現在，ひと頃ほどの勢いはないにしても，観光ブームは衰えていない。単なるレジャーだけでない旅行・探訪も増えている。エ



図17. カニサイ（化石）の復元。美濃加茂市民ミュージアム。
Fig. 17. Restoration of fossil rhinoceros, Minokamo City Museum.

コブームが生まれて、エコツアーと称する催しも行なわれている。エコツアーは本来エコミュージアム（後述）を訪れるツアーの呼称で、フランスで最初行なわれたときは地方活性化のための、観光対象のものであった。日本の、最近のそれは自然を訪ねる旅を意味していることが多く、問題が残る。

美術館を初め博物館では企画展によって入館者数を増やそうとする傾向がある。扱うものは外国の著名な作家による美術品、寺の有名な仏像・絵画・工芸品など、自然分野でいえば恐竜やカブトムシというところだろうか。国宝の阿修羅展が東京で大入りし、九州国立博物館では九州で開催された展覧会の入館者数の記録を更新して71万人を超えたという。こうした現実には博物館にとってよいことであろうが、素直に喜んでいてよいものだろうか。それは海外旅行でルーブル美術館で有名な3点セットを見、台北の故宮博物院で白菜の玉彫刻に人だかりという現象に通じることであるが、「高級見世物」であって、真の意味の博物館利用とは考えにくい側面をもつからである。

博物館と観光はこれからどのような形をとるのだろうか。いくつかの問題がある。

- ・博物館の基本と機能が確保されているか
- ・人を集めるだけになっていないか
- ・地域振興に役立っているか
- ・健全なレジャー・余暇の受け皿として必要である
- ・健全なレジャーの場となることが必要である
- ・階層別・年代別の対応が必要である 例えば高齢者 家族 児童・生徒など
- ・テーマパークとは違うが、そこから学ぶこともある

（3）健康

高齢化が進む中で、健康への関心は強い。それはテレビの健康食品、サプリメント、健康器具などのコマーシャルによく現われている。生と死の間に健康と病気があり、人は健康を維持し、長命でありたいと願うのである。そのための機関はいろいろあるが、博物館のアイテムとしても考えることができる。それどころか、現代ではむしろ積極的に健康と関連した博物館活動を進めるべきではないだろうか。

博物館のアイテムとして考えられるものを挙げると、外国では、Health（健康）、Medicine（医療・薬）、Dentistry（歯科）、Pharmacology（薬学）、Hygiene（衛生学）、Apothecary（薬種屋）、Psychiatry（精神医学）、Hospital（病院）などがあり、日本ではくすり、医学、寄生虫、健康科学、生命科学などである。

近年誕生した、健康に関する施設（いわゆる健康プラザなど）の例を見てみる。

a. あいち健康プラザ

保健・医療・福祉・生きがいを推進する施設として「あいち健康の森」があり、これは健康、運動、研究、生きがい、福祉の5つのゾーンで構成されている。ここのメイン施設として健康ゾーンの中に「あいち健康プラザ」がある。

健康開発館：健康づくり教室の実施 クッキング、レクリエーション、フィットネス、プール、リラックスセッション、ジョギング、健康度評価など

健康科学館：参加・体験型の科学館

健康情報館：情報拠点、図書室、パソコンなど、

健康宿泊館：宿泊、温泉、会議室、ホール

健康に関する総合施設で、広い意味で博物館的であるが、健康科学館はまさに展示室である。3つの展示とシアター・学習室からできている。1998年に開館している。

展示室1：からだの科学 心肺・筋肉・骨・肝臓・歯など、人体のしくみを知ること

展示室2：健康の科学 体力測定 栄養診断 モデルハウスなど

展示室3：脳の科学 脳の巨大模型 映像 パソコンゲームなど
科学館的な展示であり、インタープリターもいて、わかりやすい。大人も楽しめる展示である。展示解説書もある。

b. とやま健康パーク

1999年に開館した同様な施設である。3つの施設からなる。

国際伝統医学センター：伝統医学の調査研究

生命科学館：健康づくりについての学習

健康スタジアム：健康づくりの体験と実践

生命科学館は博物館機能をもっている。栄養・運動・休養・伝統医学の4つのゾーンで構成されている。ユニークなのは伝統医学ゾーンで、世界各国（中国・インド・チベット・インドネシア・南米・ヨーロッパなど）で調査し、収集してきた資料を展示している。チベットの「四部医典タンカ」、インドネシアの「ウサダ・ロンタール」などの貴重な資料も含まれている。古くから薬の伝統をもつ富山らしい。

研究・体験（トレーニング・プール・リラックス施設など）の場もあり、全体としても博物館的である。

こうした博物館機能をもった健康に関する場はもっと充実・拡張されてよいと思われる。人体（自分自身）に対する興味という面からも、スポーツと関係深いという面からも意味がある。自然公園をも含んだ公園施設を伴うことも多いし、ビジターセンターや生物館園、科学館とも関連する。自然館の一種としての扱いがされてもよい。また、人びとの興味があることだから、地域博物館において、健康を扱うコーナーがつくられてもおかしくない。回想法（北名古屋市歴史民俗資料館）やヒーリングコーナー（福井県立歴史博物館）なども健康関連の博物館機能と考えることができる。

9. エコミュージアムと「えこ」ミュージアム

1) 日本のエコミュージアム

（1）これまで

1970年代にフランスで発想されたエコミュージアムはすぐその後日本に紹介され、各地に“エコミュージアム”が誕生した。その間の経緯は糸魚川（1993; 1999; 2009c）、里見（2009b）にくわしい。1995年にはエコミュージアム研究会が発足し、活動を始め、現在に到っている。

筆者は前述の本・論文の中でエコミュージアムについて論じ、エコミュージアムの計画案、日本のエコミュージアム、エコミュージアムの類別、ポイント・問題点などを挙げている。繰り返しになる点もあるが、エコミュージアムについての考を整理し、包括的博物館につながるものとして将来を展望してみたい。

（2）エコミュージアム研究会

エコミュージアム研究会は設立以来国際会議・シンポジウム、各地における全国大会、研究大会、例会などを開催し、会報（年1回）を発行して第14号に及んでいる（第6号は欠号）。その活

動の状況は会誌によってうかがい知ることができる。

- a. 最初の頃は外国からエコミュージアム関係者を招いて会議・シンポジウムを開催するというものであった。
- b. 全国大会は各地のエコミュージアムあるいはエコミュージアムの活動（例えば村おこし）をしている地域で開催されている。1995年より山形県朝日町、岡山県津山市、千葉県富浦町、兵庫県豊岡市、静岡県川根地域、徳島県あさんライブミュージアム、島根県瑞穂町、滋賀県湖北地域、三重県宮川流域、東京、石川県野々市町地域、京都府丹後地域、奈良県明日香村、山梨県小菅村（2009年）、と続き、2010年は再び山形県朝日町が予定されている。地域に密着した活動であり、評価できるが、逆に学会的な色彩が弱く（研究会という名称であるが、基本的に目指すところは学会ではないだろうか）、経験交流・相互扶助的な傾向が強いといえよう。
- c. 会誌の内容についてみると、次のような特徴がある。
 - ・目次にあがっている項目(148)
 - 基本的事項 56 地域に関すること 76 外国の紹介 16
 - ・論文・研究発表・研究大会発表のアイテム(93)
 - 基本事項 47 日本 の例 38 外国 8
 - 以上の内、街づくり・地域のこと など 21
 - ・執筆者(154)
 - 大学・研究所 90 地域・博物館 53 外国人 7 その他 4

いくつかの特徴を挙げる。①初期の段階において外国人の講演が多くなされ、学習がなされた、②全体の事項で、地域に関することが多いのは大会が各地で開催されていることと関連している、③論文などの項目において、基本を扱ったものが多いのはエコミュージアムに関してまだ多くの議論があることを物語っている。一方において事例報告も多い、④執筆者に大学・研究所所属が多いのは当然であるが、地域・博物館関係者も目立つ。大学には博物館学分野の研究室は極めて少ないので、大学所属の執筆者は博物館（学）関係者でない、他の関連分野（社会学・地域学・建築学・地理学など）の研究者であることが多いと思われる。

- d. 1991年に憲章をつくり（糸魚川、2009cに紹介）、2009年に改訂された（表5）。
- e. いくつかの部会があり、その中に博物館部会も含まれている。
- f. 地域における「人づくり」の活動がある。
- g. 以上のような活動から見て、さらに憲章の改訂の際に定義の内の「博物館システム」という言葉が消え「活動のしくみ」となったこと、住民主体が強く打ち出されたことは日本におけるエコミュージアム研究において「博物館」的センスが薄くなっていることを示している。
- h. 確かに、日本におけるエコミュージアムあるいはエコミュージアムと呼んでいるものは「地域おこし」の色彩が強い。本来のエコミュージアムの考えとなぜ違うのか、どのように違うのか。

2) エコミュージアムと「えこ」ミュージアム

(1) 博物館としてのエコミュージアム

ミュージアムという限り、エコミュージアムは博物館的であるべきである。最初の発想の原点も「博物館と環境」であった。以

表5. エコミュージアム憲章 2009(日本エコミュージアム研究会ホームページ)。

Table 5. Constitution of the ecomuseum 2009 in Japan.

前文
この憲章は、G・H・リヴィエールが提唱したフランスにおけるエコミュージアムの「発展的定義」を踏まえ、日本的に解釈したものである。
定義
エコミュージアムは、地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである。
対象
エコミュージアムは、ある一定の地域の多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的に対象とする。
活動
エコミュージアムは、地域資源を学習・調査・研究・保全・利活用する機能を持ち、次のような諸活動を行う。
・学校 エコミュージアムは、地域を学び知り、地域をつくる担い手を育む住民の学校として、交流、教育、展示普及活動をおこなう。
・研究所 エコミュージアムは、地域のための研究所として、専門家と共に科学性をふまえた学際的な調査・研究をおこなう。
・保全機関 エコミュージアムは、多様な自然や生活文化を含む地域資源の保全機関として、記憶の収集および持続的利活用をおこなう。
しくみ
エコミュージアムは、住民が主体となり、行政や地域の様々なセクターと協働するしくみである。推進にあたっては、専門的職員を配し、地域の各分野や利用者の参加による企画運営、専門家との連携による学術的研究についての組織を構成する。
2009年5月24日、日本エコミュージアム研究会総会で採択された。

下、博物館の要素および機能をエコミュージアムでどのように考えればよいか検討する。

- ・資料 本来の資料の意味が変ってきている。対象となるものはある一面では拡大しているが他面縮小もしている。情報資料は重視される。
- ・人 市民参加の協働である。学芸員はより広い活動を要求される。
- ・建物 地域（テリトリー）である。複数の建物・施設を内包する。
- ・収集・保存 現地性が強い。地域内のものが主で、他は2次的となる。
- ・研究・調査 地域内のことが対象。学芸員と市民の協働が主。
- ・展示 コア施設において全体を扱い、各サテライトにおいてもそれぞれの展示がある。相互は関連し包括的である。
- ・教育・普及活動 市民活動が中心。地域活動でもある。

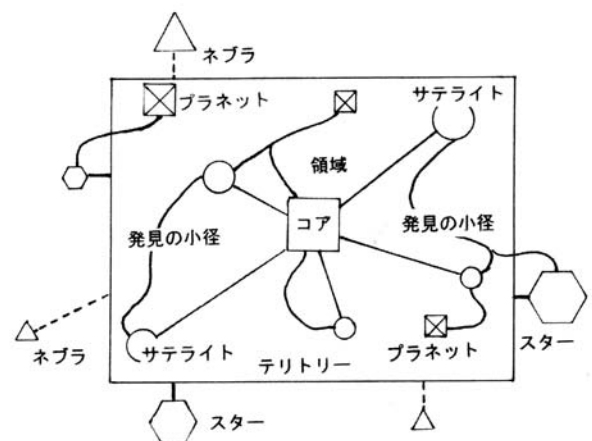


図18. 「えこ」ミュージアム概念図。

Fig. 18. General figure of the "ecomuseum".

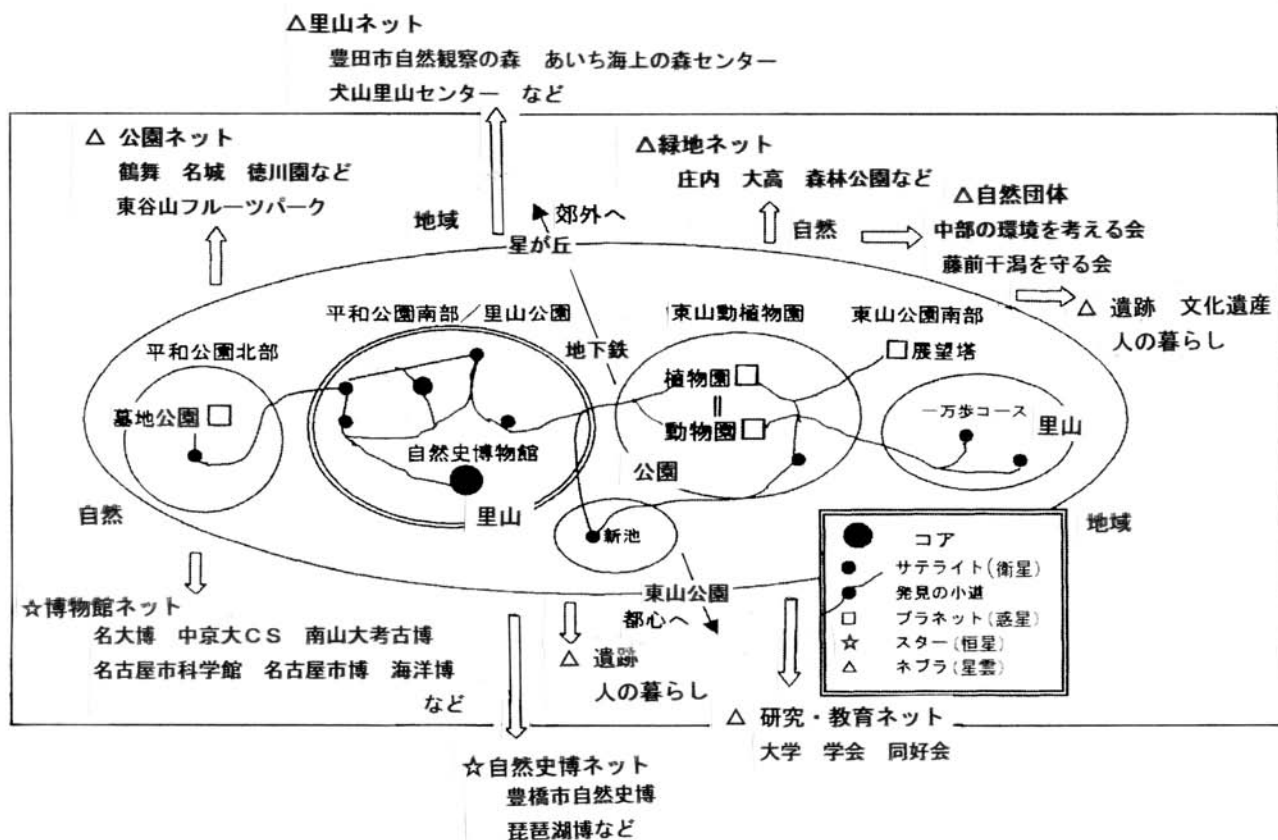


図 19. 東山「えこ」ミュージアム構想。

Fig. 19. Plan of the Higashiyama "Ecomuseum", Nagoya.

- ・情報 重要な機能の一つ、地域で中心的な役割を果たす。
- ・運営 公と民の協働。優れたコーディネーターあるいはリーダーが望まれる。NPO 中心の場合もありうる。

(2) なぜ「えこ」ミュージアムか

糸魚川 (2009c) はエコミュージアムに替わって「えこ」ミュージアムという考えを提起した (図 18)。その理由は日本で現在行なわれているエコミュージアム運動が「地域おこし(まちづくり)」を中心とした動きで、本来の、博物館としてのエコミュージアムと異なる点に疑問を抱いたからである。そして、新しい要素 (プラネット・スター・ネブラなど) を加え、地域、地域・関連地域の博物館および他の関係する機関・施設を広く捉え、連携を図ることを提案した。また、いくつかの地域についてプランを示した。図 19 は名古屋市東山「えこ」ミュージアム構想を改訂した図である。さらに、日本における問題点を挙げている。

これまでの論議をまとめて、日本におけるエコミュージアムのこれからを展望する。

- エコミュージアムは基本的に博物館であるから、博物館性を強くする。
- 市民との連携をはかり地域とのつながりを強くする。
- 他の博物館と連携する。
- 他機関とも連絡をはかる。
- 主体とする活動はいろいろである。その館の特性を生かして考えればよい。
- 運営主体も場合による。日本の行政は縦割りが多すぎるの

で、その調整ができるとよい。

- 「エコ」は ecology (生態学) のみを表すだけでなく、economy (経済学) の側面をもつことを認識する。
- 最終的な主題は「人と自然のかかわり」である。
- 優れたコーディネーター (リーダー) を用意する。
- 包括的な活動をする。

「えこ」ミュージアムの名称はエコミュージアムに回帰すべきものである。「えこ」ミュージアムは筆者が 21 世紀の博物館のあり方として提案し・あるべき姿として主張している「包括的博物館」(後述) のひとつの典型的なかたちであり、今後、さらに発展することが期待できる。

10. 大学博物館とビジターセンター

大学博物館とビジターセンターはそのあり方において他の博物館と違った側面をもっている。大学博物館は大学内に大学がつくった総合あるいは単科の博物館である。大学と共にあるという点で他の博物館と区別される。しかし博物館という、大学そのものとは違う性質ももっている。ビジターセンターは各種の野外施設に伴うことが多く、博物館と言い切れない場合もある。

しかし、ヨーロッパの各国で生まれた大学博物館、アメリカの自然公園と共に発達したビジターセンターは世界中の先進国において、存在が当然と考えられるような博物館的機関であり、開発途上国においても将来性をもった、必要とされる存在である。両

者とも本論の主題である包括的博物館につながる可能性をもっている。日本での状況も含めて、そのあり方を検討したい。

1) 大学博物館

(1) 日本における歴史

オクスフォード大学のアシュモレアン博物館は1683年に創立された世界最古の博物館である(糸魚川, 2009a)。このことは大学が「もの」を集める機能を持ち、博物館の具える性格をもつことを示している。それは日本でも例外ではない。西野(1996)によれば、東京大学医学部の開業式(明治12年—1879, 明治天皇の行幸があった)には動植物、化石・鉱物、骨格・解剖標本が展示されたという。これは大学における列品館、すなわち大学博物館の始まりといえよう。残念ながら継続せず、東大に本格的な博物館が出来るのは戦後になってからになる。

それより以前、東大付属小石川植物園は1874(明治7)年に、北大農学部付属博物館は1877(明治10)年につくられている。日本においても大学博物館が早いスタートを切ったのである。その他、戦前には東京農工大付属繊維博物館(1887)、東京農大農業資料室(1905)、秋田大学鉱業博物館(1911)、国学院大学考古資料館(1928)、早稲田大学演劇博物館(1928)、山形大学博物館(1929)(現在の大学名による)などの大学博物館がつくられていた。

初期の「博物館研究」に大学博物館についての2つの記事がある。ひとつは一記者:「大学教育に於ける博物館の位置」(第2巻第8号, 1929)で、イリノイ大学の博物館学芸員F. C. Baker氏の論文の翻訳である。イリノイ大学における教育と博物館(資料・展示など)についてまとめたものである。日本で大学などが博物館設備を怠っているのを参考のために訳したとしている。

他は「大学専門学校と博物館」(本会調査部:第14巻7号, 1941)である。既設の大学専門学校博物館にアンケートし、東京農大、国学院大学、広島文理大など7館の現状をまとめた表がつくられている。

(2) 大学博物館の現状

a. 大学博物館の種類—資料を軸に

- ・教育資料…師範学校系(教育博物館の系譜、ドイツのHeimat博物館の流れ) 山形大 岐阜大など
- ・研究資料…帝大系(研究資料の蓄積) 東大、京大など
- ・同上…私大系(研究資料・歴史資料) 明大、南山大など
- ・卒業制作の蓄積…美術系 東京芸大
- ・大学+同窓会コレクション 秋田大
- ・PR・観光地 東海大

b. 大学博物館の機能

- ・研究面 資料保存 研究資料
- ・教育面 学生用 一般用 PR用(社会へ)

c. 大学博物館数

- ・亀井(1989) (日博協(編), 1978 などによる)

	公立館	私立館	計
200 m ² 以上	30	27	57
その他	8	15	13
計	38	42	80

- ・大堀(編著)1997に基づく集計 112館

・地域別

北海道	15 (13.4%)	近畿	24 (21.4)
-----	------------	----	-----------

東北	11 (11.6)	中国	4 (3.6)
関東	13 (11.6)	四国	1 (0.9)
東京	25 (22.3)	九州	6 (5.4)
中部	11 (9.8)		

・設立主体別

公立	59 (52.7%)	大学全体	16 (27.9)	学部	43 (72.9)
私立	53 (47.3)	"	45 (84.9)	"	8 (15.1)

・分野別

民俗	1	考古	10 (8.9%)	歴史	17 (15.2)	工	3
農林水産	8 (7.1)	自然史	5	科学	6	美術	8 (9.1)
総合	9 (8.0)	植物園	26 (23.2)	水族館	4	その他	15

・タイプ

研究	62 (55.4%)	教育	22 (19.6)	観光	4	その他	24
----	------------	----	-----------	----	---	-----	----

・其の他の学校に付置

小学校	33	中学校	3	高校	18	短大	3	その他	7
-----	----	-----	---	----	----	----	---	-----	---

・参考(外国)(西野, 1996)

- ・アメリカ 794館/526校(大学数 1158)

種類 美術 380館(47.9%) 自然科学 179(22.5)

歴史 118(14.9) 植物園 50(6.2) 総合 43(5.4)

其の他 24(3.1)

- ・イギリス 126館/51校(大学数 117)

- ・フランス 9館/8校(大学数 78)

以上のデータはやや古い。日本の大学博物館のアウトラインを表していると考えられる。特徴をまとめると

- ・外国(特にアメリカ)と比して多いと言えない。
- ・1986-1996年で増加している。
- ・地域的には東高西低である。
- ・公立:私立はほぼ1:1である。
- ・植物園、歴史関係の館が多く、アメリカと傾向が違う。

(3) 事例

糸魚川(1993)にいくつかの大学博物館の事例が示されている。最近の例を活動も含めて挙げよう。

- ・京都精華大学 京都国際マンガミュージアム:国内唯一のマンガ学部をもつこの大学が京都市と共同して2006年に開館。約32万点を収蔵する。「マンガの壁」には約5万冊が約140mにわたって1階から3階まで並べられ、自由に利用できる。マンガの描き方教室、特別展などもある。この他、明治大学にマンガ図書館がつけられるとの報道があるが、催事場・研究室を備えるとのことであるから、博物館的機能も備える事になるだろう。

- ・立正大学文学部博物館:世界の釣鐘を収蔵する。

- ・大阪藝術大学博物館:蓄音機のコレクションが有名。

- ・東海大学海洋科学博物館・自然史博物館:水族館には駿河湾の魚などを約1万匹飼育する。巨大なエイも泳いでいる。自然史博物館には恐竜化石の展示などもある。観光目当てのお客さんも訪れている。

- ・駒澤大学禅文化歴史博物館:曹洞宗の禅文化を扱う。建物は1928年に建てられた東京都歴史的建造物で、フランク・ロイド・ライトの設計である。

- ・東京農大「食と農」の博物館:壁に並んだ280本の日本酒瓶は卒業生の「蔵」のものである(図20)。鶏の剥製のコレクション(115体)もユニークである。隣接のカフェにはオリジナ



図 20. 東京農大[食と農]の博物館。

Fig. 20. Food and Agriculture Museum, Tokyo University of Agriculture.

ルのお菓子や飲み物もある。

- ・常磐大学博物館学博物館：博物館展示の手法を分類したユニークな展示をもつ。
- ・東大総合研究博物館「鳥のビオソフィア」展（2005年）と「鳥学大全」の出版。山階鳥類研究所の鳥類標本の展示、「アートとサイエンス」の協働（自然物を職人の手わざによって作った標本）の結果である。さらに「鳥学の現在」を伝える総合的な研究図録として「鳥学大全」を出版した（西野，2008）。アートと科学を結ぶ包括的展示のひとつの例である。
- ・鹿児島大学総合研究博物館：アウトリーチとしてフィールドミュージアムをつくる活動。県内各地の文化財・自然を選び、保全・維持をする。データベースをつくらせて公開している（大木，2008）。
- ・東大駒場博物館：企画展「はじめて出会う囲碁の世界」(2007)。囲碁の基本を展示やクイズなどで紹介し、対局が行われた。
- ・京大総合博物館：展示「熱帯雨林の生物多様性と共生系」マレーシアで行なっている共同研究の成果をジオラマなどで展示している。
- ・東京理科大学近代科学資料館：「計算機の歴史」の展示。体験コーナーもある。
- ・東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館：民芸運動の中心だった染色作家のコレクションとその展示である。
- ・岩手大学ミュージアム本館：宮澤賢治も学んだ学校の建物が残っており、博物館として利用されている。
- ・杉野学園衣裳博物館：西洋衣裳を中心に日本の着物、アジア・ヨーロッパの民族衣装など、約1400点を収蔵・展示している。
- ・The Wonder Box ユニバーシティミュージアム合同展 東京芸大大学美術館 2006年（図21）：25の国立大学博物館（国立科博、国立民博を含む）の「お宝」を一堂に集めて展示した企画展。それぞれの博物館の特徴が出ていて面白い。ニッポノサウルス（恐竜）復元模型（北大）、牛の腸石（岩手大）、田上隕石（国立科博）、「会話する足跡」（香川大）などが見られた。

このように、大学博物館は大学でのさまざまな分野の研究・教育を反映して多様である。

（4）大学博物館のありかた

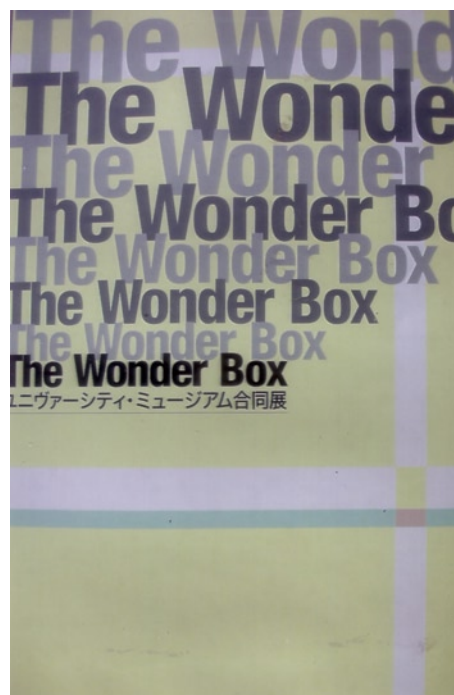


図 21. The Wonder Box ユニバーシティミュージアム合同展図録。

Fig. 21. Catalogue of the joint exhibition of the university museums.

西野（1996）は大学博物館のキーワードとして、「資料保存」、「学の融合」、「大学と社会」を挙げている。このことは基本として認識できることであるが、具体的なことも含めてありかたをまとめて見る。

- 研究面：資料の保存・利用 研究成果の公表 博物館学の構築 展示の研究
- 教育面：学生への教育普及（専門 教養 など） 博物館学の講義と実習（内容の検討を含めて）学生の学習 一般市民へのサービス（研究・教育など大学の情報を伝える、質問への回答など）
- その他：大学博物館理念の確立 学内の交流（職員・学生）情報の収集と発信 市民との交流 展示による普及 社会貢献 他の大学博物館・各種博物館との交流 自己点検・評価 大学のPR
- キャンパスエコミュージアム（糸魚川，2009c）の試行

2）ビジターセンター

野外に存在する遺産（自然・文化・産業など）を保護・保存することに関心が高まり、公園・遺跡・天然記念物・建造物・野外博物館などの形で保存されることが多くなった。こうした場合にはビジターセンターが用意され、博物館と共通する形をとることになり、同様に考え・扱うことができる。すでに何度か論じた（糸魚川，1999；2009a）が、新しい資料も加えて、包括的博物館の姿のひとつとして扱ってみたい。

（1）事例

- 豊田市自然観察の森
豊田市は日本最大の自動車メーカーのある市としてよく知られているが、市域の多くは里山で緑の多いところでもある。そんな

中で市街地の東側にある雑木林や湿地の地域（28.8ヘクタール）が「豊田市自然観察の森」として整備され、1990年にオープンした。近年の市町村合併は市域の拡大を生み出し、山林・農村地域が多くなった。面積でも愛知県の1/6を占める[大]都市である。

ここにあるビジターセンター「ネイチャーセンター」が老朽化したこともあって、森全体の整備をし、市民の憩いと環境学習の場をつくるべく整備計画が生まれ、2007年に新しくネイチャーセンターをつくり、旧の建物を収蔵庫とすることとなった。

まず新しい建物の設計がコンペによって選ばれ、「森への入り口一画」をイメージした変形X型2階建ての建物ができた。センターの中の、展示を含めた設備の設計は市民や学識者を加えた委員会によって検討された。ビジターセンターであるから、「森」へ出かけて自然を体験しようとする人たちへのガイドと後で体験をチェックする仕掛けが必要である。「あんないうラボ」・「かつどうラボ」・「いきものラボ」などがつくられ、一般的な案内展示やレストスペースも考えられている。

「道」をイメージした「つくり」はコンセプトとしては面白いが、幅8mの長い建物が設計され、活動スペースと展示の両方を展開するには狭く、菱形一六角形を基準とした設備の形は使い勝手が悪く思われた。

活動はビジターセンターとしての学習活動だけでなく、調査・研究や資料の収集・保存まで及ぶことである。さいわい旧センターが資料庫として再利用されるということだからぜひこの面の活動にも重点を置いて欲しい。また、この「森」の地域だけでなく、豊田市全域を対象に考えることも必要である。

多くのボランティアの団体がおり、建設に協力しておられる。すぐれたリーダーを用意し、これらの方々と多様な協働が出来ればこれからの活動も成功するだろう。指定管理者制度による運用であるが、しかるべき受け皿となる組織を用意する事も重要である。今年度末完成ということであるから結果を見たい。

b. あいち海上の森センター

すでに述べたように（糸魚川、2009a）、2005年開催の愛知万博の瀬戸愛知館の建物の一部を再利用して「あいち海上の森センター」が2006年にオープンした。里山である「海上の森」のビジターセンターとして、万博の理念と成果を継承する自然施設で

ある（図22）。

展示室は海上の森のリアルタイム映像を含めて、森の自然と人の暮らしを解説しており、ビジターセンターとしての役割を果たしている。研修室・工作室・情報ライブラリーなどがあり、各種の「学校」、調査学習会、「大学」などの参加体験学習事業が行われている。愛知万博の際に行われた多くの調査の結果を踏まえ、森の自然環境と暮らしをまとめて「海上の森の自然史」が発行されていて（2007）、海上の森についての情報の基礎となっている。

主体となる「海上の森」は整備されて遊歩道がつくられ、拠点となる設備もある。2010年に名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催されるが、その際にこの地域へのエクスカージョンが計画されていて、コースの選定・整備が行なわれる。かつての里山「海上の森」は昔の里山としての名残をわずかに残すだけで、ほとんど機能していないが、「自然」だけは別の形で残っている。自然を楽しむ上では都市近郊にあることもあって利用しやすい地域である。

資料の収集・保存や調査・研究などの博物館の基本機能にまで活動が及ぶこと、さらに、愛知県全体の自然についての情報センターの役割を果たすことが望まれる。

c. 自然公園・遺跡公園など

国立、国定、国営、県立、市立などの自然公園・遺跡公園は野外博物館に通じる側面をもって、ビジターセンターをもつことが多い（図23）。センターをどのようにするか考えてみよう。

☆自然公園のビジターセンターをつくる

・公園内で「切り取り」をする

・5w1hで

なにを（what）：公園内のいろいろ（自然と人のつくったもの）

動物、植物、地質、地形、海、湖、沼、田、畑、森、林、家、道、工場、神社、寺 など

いつ（when）：いつでも 年、四季、月、日、朝、昼、夜など

だれが（who）：だれでも 市民が主 学芸員などスタッフ

見学者 利用者 など

どこで（where）：どこでも 山、丘、台地、平地、里、海辺、川畔、池 など

なぜ（why）：公園の状況を知るための資料（保存、展示、学習）



図22. あいち海上の森センター展示。

Fig. 22. Exhibition of the Aichi Kaishonomori Center.



図23. クッチャロ湖ビジターセンター。

Fig. 23. Visitor center of the Lake Kuccharo.

- をつくるため
- どのように (how) : もの, 写真, イラスト (写生), 音, ビデオなどを採取する
- ・二次資料 (コピー, ジオラマ, 模型, レプリカ など) を作成する
 - ・集められた多数のアイテムから組合せをつくる 同系列, 異次元, 変えられる組合せ
 - ・フリー展示 島展示 ストーリーをつくる ネットをつくる
 - ・時系列 (年, 四季, 月 など) での展示替え
 - ・別に全体の解説をした簡単な総合展示 トピックス展示
 - ・公園に入る前の学習, 後のチェック の仕掛けをつくる
- その他の活動
- ・資料の収集・保存 データベースをつくる 解説リーフレット 学習活動 情報収集・発信 など
 - ・市民参加 ボランティア 他機関との連携 博物館の活動を切り取って, できることをやる 目指すところは包括的博物館活動

これからのビジターセンターは次のように考えたい。

- ・ビジターセンターは基本的に博物館である。
- ・「場」「もの」「人」の3要素と「学習」「収集」「研究」「展示」「情報」の5機能をもつ
- ・フィールドミュージアムあるいはエコミュージアム的な博物館である
- ・市民との協働が基本
- ・調査・研究面では地域の調査・保全が主 充実したい
- ・野外での自由度は高いほうがよいが危険性との兼ね合いも考える
- ・人を「つくる」活動をする
- ・モニタリングシステムを用意する
- ・市民の自然への入口 (ハードとソフトの両面で) となる
- ・包括的な活動を目指す

11. 包括的博物館－21世紀の博物館像

包括的 (comprehensive) という用語を博物館に適用しようとする発想は展示から生まれた。フランス国立自然史博物館 (パリ) や滋賀県立琵琶湖博物館の展示に触発された結果である (糸魚川, 1999)。用語が先行し, 必ずしも内容を伴わない理念であったが, その後, 思考を深めて展示についての議論を展開した (糸魚川, 2009b)。

本論文はこの包括的という考えをさらに発展させ, 博物館に, そしてその活動に援用しようとするものである。21世紀の博物館像としてこの包括的博物館をとらえ, 具体化することが出来る」と期待している。

1) 見えてきたこと

本論文の第1～10項では, 現在の博物館において「包括的」ということに関連すると思われる事象を取り上げている。最初に示したキーワードも参照しながら, これまでの議論から見えてきたことをあげる。これは同時に現在の博物館像を表わすものであろう。

- (1) 博物館は「もの－資料」, 「人」, 「場－建物」からなる。

- (2) 博物館の機能は研究面 (収集・保存, 調査・研究), 教育面 (展示, 教育・学習・普及), 情報, 社会活動, 運営 からなる。
- (3) 博物館の種類は多様であるが, 主体は歴史館と自然史館, それらの複合である総合館と郷土館である。新しい形としてエコミュージアム (「えこ」ミュージアム) がある。大学博物館とビジターセンターも異なる形の博物館である。
- (4) a. 博物館活動は主として学芸員によって行われる。
b. 市民参加, 市民との協働が行われている。博学連携はそのひとつである。
c. 活動の形は確かな基本に基づくが, ハード・ソフトの両面においてバリエーションであり, フェジイでゆるい仕組み・自由度・ゆらぎをもつ。
d. 点→線→面→立体 と進歩する。
- (5) 現代的テーマとして, 環境, 観光, 健康がある。
- (6) 博物館ネットワークは必要であり, 重要である。
単科館－総合－歴史館－他の博物館－その他の機関 など。
- (7) 現在の博物館環境: 一財政問題, 指定管理者制度, 博物館法, 評価, 新しい試み (動物園・美術館 ほか), 歴史的背景と将来展望は? お楽しみ施設の拡充 (ショップ・グッズ・レストランなど)。
- (8) 博物館学の確立。
- (9) 博物館法の改正, 博物館界の活性化。
- (10) 社会的環境: 一社会不安, 財政危機, 生活不安, 博物館の位置づけ。
- (11) 市民は博物館活動に参加し, 体験する。[見る・楽しむ]・[学ぶ・理解する]・[考える] とレベルアップする。
- (12) その他
a. 地域性と国際性の両面をもつ。
b. 多様性・両極性がある。
c. 時間的・空間的な発展をし, 進化をする。

2) 包括的博物館のイメージ例

既存の博物館の中にすでにあり, あるいは今後検討される博物館の新設・改造計画中にもあると思われる。いくつかの事例を検討する。

(1) 滋賀県立琵琶湖博物館一ひとつのモデル

包括的展示の例としてC展示室を紹介した (糸魚川, 1999; 2009c)。この館は基本理念として, ①テーマをもつ, ②フィールドへの誘いとなる, ③交流の場である を掲げる (以前はテーマ, 参加型, 知識・情報集約型, アミューズメントの博物館であった) を掲げている。次の5つのこと ①研究・調査, ②交流・サービス, ③情報, ④資料整備, ⑤展示 を活動方針とする。これらの理念・活動スタイルは模式図に示されている (図24)。

理念・方針だけでなく, この博物館は見聞する限り高いレベルの包括的活動を行なっている。展示についてはC展示室が包括的であることはすでに触れたが, 展示全体は各展示室に相互を結びキー展示をつくらせて結ばば, あるレベルまでは包括的にできる。

包括的活動の一例は「うおの会」の活動である。その内容は「みんなで楽しんだうおの会」(琵琶湖博物館研究調査報告, no. 23, 2005) に詳しい。

1998年に立ち上げられた「淡海淡水魚研究会」が発展して「うおの会」となる (2000年)。調査に参加することができる市民を

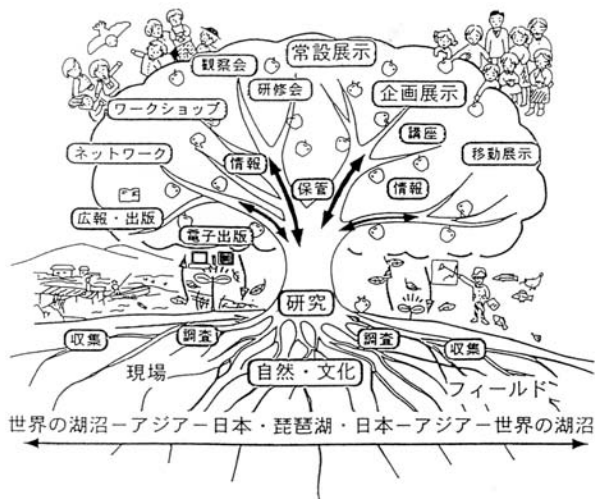


図 24. 琵琶湖博物館の活動イメージ (同館資料).

Fig. 24. Image of activities of the Biwako Museum.

募り、調査活動を開始した。その結果を科学的に使用できるものにするため、調査マニュアルをつくり、滋賀県内の魚類分布調査を実施した。その後の調査の結果も含めてまとめたものが上記の出版物である。

さらに発展して「琵琶湖お魚ネットワーク」を2005年より開始し、だれでも参加できる体制がつけられた。作り直したマニュアルをベースに、初級と上級とに分けて調査してデータを集めた。その後、「だれでも・どこでも琵琶湖お魚調査隊」として継続して行なわれていて、2009年7月現在で15,000点を超えている。

うおの会のスローガンは「魚を愛し、魚とりを楽しもう。そしてその生息環境を将来に残そう」とであるという。このように継続した会の活動によって、各地に指導的な役割を担う人が育ち各地に活動が広がって、観察会や調査が行なわれている。結果として環境保全に関心をもつ人が生まれ、モニタリング活動を初め各種の活動を続けている。うおの会の活動は調査・研究からその結果を科学的論文として公表し、さらに「人が人を育てる活動」までに広がり、まさに博物館の始めた「包括的活動」である。琵琶湖博物館は現在における包括的博物館のモデルのひとつといえよう。

(2) 大阪市立自然史博物館—幅広い活動

伝統ある自然史博物館である。大阪という大都市は残されている自然が少ないと思われるのに、そこに現在のこの館があるというのは先人の努力と継続した活動の結果であろう。

豊富な資料(寄贈標本も多く含まれる)と地域から始まって広がっている研究活動、それらに支えられた展示、普及教育(学習)活動は多彩である。普及教育活動には普通のプログラムの他、人材育成、市民サービス、来館者サービス、ショップ、博学連携などがある。

展示改装は順次行なわれていて、最近の一例をすでに示した(103ページ)。かなめともなる「進化」の展示が早い時期に完成することが期待される。最近の活動である、地域のさまざまな会へ呼びかけての「大阪湾いっせい調査」は包括的な活動の例である。これまでのこの館の活動は包括的活動を行ないうるキャンペーンをもっていることを示唆している。

(3) 飯田市美術博物館—協働

歴史・自然史・美術の3分野の複合博物館である。設立のいきさつから現在の姿があるが、館の全体像は包括的とは言えない状況下にある。ここで取り上げるのは自然分野の活動である。この地域には「伊那谷自然友の会」という歴史ある自然団体を初め、地域活動をしている会が多くあり、博物館はこれらの会と密接な関係をもっていて、協働して活動している。2008年に開催された特別展「ハナノキ湿地の自然史」は「はなのき友の会」初め多くの協力者を得て開催されたものだが、パネルを基にわかりやすい図録がつくられている。展示だけで終わるのは残念との声で製作されたと聞く。

このほか、「南アルプスの山旅」は特別展「南アルプス—形と成り立ち—」と関連してつくられたものであるが、単なる展示解説書でなく地形・地質を楽しむガイドとなっている。内容的には学芸員の調査・研究を軸とし、館外の協力者を得ての成果である。研究をベースにした展示が行なわれ、さらにそれが一般化するというプロセスであり、「包括的」の側面をもつ。

自然分野だけに目を向けての議論で、この館の全体の活動を見ていないきらいがあるが、この館の地域と結合した活動は著しい。各分野の直接的な連携は難しいかもしれないが、地域を媒体としての活動に突破口が見出せるであろう。

(4) 戸隠地質化石博物館—地域密着・日常性・リーダー

展示に関してはすでに述べた(第6項)。その中のミドルヤードという仕掛けは博物館の活動として展示が外へつながる形を見せている。地域のシンボルでもあった小学校の建物を再利用したという点もある意味では地域とのつながりを意味しているのであろう。小さな村の博物館が合併によってむしろ規模の大きかった他の博物館を取り込んで新館となった。

このことはこれまでのこの館の地域に密着した活動を抜きにしては語れない。それはまさに包括的活動であると言えよう。

地域の資料を材料とし、地域の人を巻きこんでの活動は目ざましいものがあり、その中心となったのは学芸員である。個人的な能力に負うところが多かった活動であるが、スタッフも増えてこれからは活動の仕方も継承されるだろうし、パワーも増したのであるから、より積極的な活動ができよう。それは包括的活動につながるものであろう。

(5) 美濃加茂市民ミュージアム—アイディア・視点、資料の集積と継続性

糸魚川(2009b; 2009c)、可児(2009)などにより紹介されているが、その名の示す通りこの館の市民と提携しての活動は目ざましい。中でも博学連携活動は目立つが、「包括的」を示唆する試みがある。2000年にはじまった「藝術と自然・美濃加茂自然環境会議2000」(図25)は1980年代にこの市で行なわれていた「彫刻シンポジウム」の流れを受けついで、開館記念展として企画された。主題は「人と自然と藝術」で、人びとにこのテーマを考えるインスタレーション、ワークショップ・講演会などのイベント、企画展を提供するのがねらいである。博物館は森の中にあり、ピッタリの環境(場)を提供している。

具体的には博物館において作家が現地製作をした野外作品の展示、インスタレーション、市民参加のアート活動といった構成である。若林 奮、大久保英治、山口啓介、栗田光一、太田三郎、篠原猛史、木藤淳子といった現代作家が参加し現在に到っている。



図 25. 「美術と自然」図録. 美濃加茂市民ミュージアム.
Fig. 25. Catalogue of the exhibition of "Art and Nature",
Minokamo City Museum.

すでに触れた(糸魚川, 2009b)ようにこの企画はアートの立場から自然の意味を問うものであるが, 自然の立場からの視点の密度は薄い, 自然の実態はどこにあるのか, 意味はなにかを問う設問はない. 自然をテーマとし, 素材として自然を捉えて見直すことはよいが, もう一步自然に踏み込むことができるはずである.

昔から自然はよい材料をアートの世界に提供してきている. 改めて両者の新しい関係を探る, 特に自然の立場からの企画はできないものだろうか.

(6) 博物館ネットワークアイデアとつながり, 力の向上

博物館ネットワークの活動はすでに多くの場で行われている(糸魚川, 2009a). 共同しての博物館活動, 情報交換, PR, 人的交流など, その広がり大きく多様である. 例を示そう.

東海地方では産業観光と関連してのイベントが多い. 名古屋市商工会議所とJR東海が主催する名古屋市周辺の産業観光には多くの博物館(愛知・岐阜・三重, 静岡県の一部を含む)の名が挙げられている. 愛知・岐阜・三重3県の観光連盟の産業観光スタンプラリー 2009 も同様に多くの博物館が含まれている. 「ぎふ東

濃アートツーリズム 2009」(ミュージアムと道の駅をめぐるスタンプラリー)(図 26)は美術館・博物館と今人気の道の駅をつなぐ企画で, 岐阜県の東濃地方で行なわれていて, 人気もあるようである.

一步進んで, 博物館が共同で企画し, 活動することもできる. 収集や資料交換, 共同研究などもあるが入りやすいこととして展示がある. 現在(2009年夏~秋), 名古屋市博物館など5館で展示されている「伊勢湾台風50年」はそのひとつであろう. 50年前, 未曾有の被害を出したこの台風の記憶も時代と共に薄れようとしている. 次代へつなぐためにも今記憶を新たにすることが必要で, 時宜を得た企画と言える. しかも地域によってその内容は異なるからそれぞれの場で展示が成立する. そして全体として見れば, アイテムを包括的に捉えることができる. 名古屋市博物館の展示はフリーコーナーを使った小さい展示で期待はずれであった. 50年という節目であればこそ, もう少しやりかたはなかったのかと思われた. 他を見ていないのでこれ以上のコメントはしないが, 共同展という企画がよかっただけに残念である.

今企画され, 来年実行されようとしている「木曽川流域共同展」もその一例である(可児光生・久保禎子私信). 木曽川は長野県に源流があり, 伊勢湾に注ぐ大河である. その流域には豊かな自然とそれを基盤とする人の暮らしがある. 木曽谷から伊勢湾まで, 流域にある博物館(木祖村郷土館, 中津川市の博物館, 美濃加茂市民ミュージアム, 一宮市博物館, 弥富市歴史民俗資料館など)を中心に, 多くの博物館を結んで共同展を行なうとするこの企画は各館の特性を生かして, 木曽川に関連することならテーマは自由, 日時は同時的で行い, 巡回展とはしないということである. 博物館をつなぐという点だけでも意味があり, よい結果が生まれることを期待したい.

こうした博物館相互の共同展は主題あるいは主軸を決めればさまざまな形で可能である. 同種のテーマ, つながること(川, 道, 航路など), 地域など, 線から面までの形で広がる. 巡回展・同時展, 資料の貸借, アイデアや方法・情報の交換と, さまざまな形の共同が可能である.

単純な人寄せから脱して, 博物館が協力することにより ①連帯ができる, ②力を増す, ③強くなる, ④やりやすくなるなどの利点生まれ, 博物館活動の活性化ができ, 包括的活動につながれると思われる.

(7) “愛知県立自然史博物館” —なぜ今か, 今からでも?

愛知県は博物館数で見ると全国で第7位(糸魚川, 2009a)であるが, 県立の自然史館はない. 東三河には豊橋市自然史博物館, 鳳来寺自然科学館などがあるが, 名古屋を中心とする地域にはほとんどないといってよい. 瑞浪市化石博物館などが肩代わりをしている感がある. その愛知県が最近, 自然史博物館に関して聞き取りを始めた. 来年(2010)に名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が行なわれることと関連してのことらしい. 今できるのか, つくるとすればどうしたらよいのか, 検討する. 先ず, 現在の状況を見ると

- これまでなぜできなかったか・・自然を大切に思わない, 「ものづくり」優先の地域性
- 市民の意向は・・市民が望んでいるかの調査はあるか
- 首長はどう考えているか
- 社会環境は? 財政基盤はあるか



図 26. アートツーリズム(市之瀬廣太記念美術館).
Fig. 26. Sign of the event of "Art-tourism".

- e. 規模は？ 他県の、1980～1990年代の規模では不可能
- f. 愛知県には優れた自然がある
- g. つくるチャンスではある
- それではどのように進めたらよいか
- a. テーマは「自然と人」とする
- b. 「環境」・「自然保護」・「生物多様性」・「災害」・「健康」もテーマになる アイテムを募集する
- c. 計画3年、実施5年、10年計画で
- d. 既存の館のチェック、よいところをまねる
- e. 大型館を指向しない 特色ある館を
- f. 理想的な形で提案し・実現する 未来へ向かって、 他県・他国へメッセージを
- g. 市民参加は不可欠 ボランティアを
- h. 先ず「人」を 優れたリーダーと熱意のある学芸員、強力なサポーター
- i. 「もの」を集める 寄贈と採集 場合によっては購入
- j. 「場」を決める アクセスのよいところ（里山）の中 自然のあるところ
- k. 出来ることから始める
- l. 展示は「百物館」構想（糸魚川、1999）、切り取り方式（第10項－2参照）
- m. 情報収集・発信の場に
- n. 博物館の基本的活動を保証する
- o. 県内の他館と提携 時には取り込み・併合も サテライト方式もある
- p. ネットワークをつくる
- q. 前進的に活動の継続を
- r. 活動は包括的に ネットワークがベース

（8）瑞浪市化石博物館—再生のために

これまでに何度か紹介した（糸魚川、1979; 1982; 1993; 1999; 2009b）。1974年開館、体験・研究・地域性などの特性を持つ単科の博物館である。現在でも5万人近い入館者があり、活動的で内容も悪くないが、35年も経つと老朽化は否めない。リメイクの時期が来ているといえる。現実的ではないが、プランを作りたい。

瑞浪市は日本のほぼ真ん中に位置し、山—丘陵—台地—平地と連なる地形があり、名古屋から電車で50分という距離にありながら自然が残されている、そして災害も少ない恵まれた土地である。土地は里山、農地として利用され、東海丘陵要素と呼ぶ遺存種を含む植生がある。資源としての陶土は長い歴史をもつ陶磁器産業を生み・育てて来ている。なだらかな土地には多くのゴルフ場があり、工場団地もつくられている。

丘陵をつくる地層、瑞浪層群は豊富な化石を含み、日本でも有数の化石産地となっている。この地層と化石を材料として化石博物館がつくられたわけである。日本では早い例と言える。

ここで再生をプランするわけであるが、さまざまな形がある。現在の化石の館の継続、自然史系の館、郷土館（自然と人文）、エコミュージアムなどである。化石博物館については糸魚川（2009b; 6項－1）、エコミュージアムについては糸魚川（1999; 2009c; 9項－2）で論じた。これまでの経過を考え、現在・未来を見据えて自然史系（化石・地層、動植物、環境）の館とし、「人」とのかかわりを加味した博物館を考えて見る。

これまでの博物館を見ると、よい点と反省すべき悪い点とある。前者は①自然条件に恵まれている、②調査・研究の成果があった、③自然、とくに地層と化石について情報を公開し・学習の場を提供した、④人材を育成した、⑤小回りのきいた自由度の高い活動をした などである。欠点として①マンネリズム、②老朽化（設備と内容）、③人が少ない、④財政問題、⑤市民の認識が高くない（内より外の評価が高い）などである。これからも条件はよくないが、～5年くらいの年次計画で実現できないかと思われる。

計画として

- a. 他館（特に小型館）のチェックと比較・・・うまく行っている館とそうでない館）
- b. 新しい方針に沿ってのプランづくり
- c. 化石以外の資料・データの収集
- d. スタッフの充実（館長兼務も含めて古生物・動物・植物各1）
- e. 建物の新築（立地）現博物館の近くに 約2000㎡（展示600㎡）、経費10億円（展示も含めて）
- f. 収集・保存・研究 現在の活動の緩やかな継続 地域の自然の調査・資料収集（動植物）
- g. 展示 現在の展示を、6項の包括的展示を応用しながら自然全体、「自然と人」へ拡張する 収集資料の最大活用をはかる
- h. 学習 地の利を生かした活動（野外観察地（図27）の整備・強化、PR）地域の学校との連携 市民の生涯学習の強化
- i. 情報 データベースの充実
- j. 広域（例えば名古屋市など）への展開 国際性の強化
- k. 活動の包括化
- l. 市民参加の活動を展開する
- m. 市民に自然、そして博物館の重要性を認識してもらう
- n. 博物館の再生を市の活性化につなげる
- o. 博物館のPRを市のそれにつなげる
- p. 他の博物館との連携を強める

博物館を変えれば市も変わる。未来へ豊かな自然とその実態を正しく伝えるために、困難な時代であるがトライしたい。



図 27. 瑞浪市化石博物館野外学習地。

Fig. 27. Open air study site of the Mizunami Fossil Museum.

（9）滋賀県の図書館—よく似た活動

図書館を地域づくりの起点としようという運動がある。失われ

ようとしている資料（市民の中にあるものを含めて）を市民による収集によって保存し残そうということで、それは歴史を掘り起こすことにつながっている。その結果を市民に戻すこと、展示してみんなに見てもらう（一般化する）ことも行われる。活動の結果を市民と共有しようという試みで博物館の包括的活動に共通している。愛知川図書館を初め、いくつかの博物館にその例が見られる。滋賀県は1980年に「住民の暮らしに役立つ図書館」の理念の下、整備して館数が5館から46館に増えたという（2008年）。また、1人あたりの貸出数は全国トップである。広汎な活動が結果を生んでいるといえよう。

3) 包括的博物館の形

包括的博物館は次のような形もつ。

- (1) 博物館（もの・人・場のある）である。
- (2) 有機的運動体である。
- (3) ひとつの博物館、もしくは複合した博物館群である。
- (4) 包括的とはまとめる・結ぶ・包むことであり、形は点→線→面→立体となる。
- (5) 過去から現在へ、そして未来へ活動をつなぐ。
- (6) ソフト・ハードの両面でバリアフリーである。
- (7) 博物館活動（収集・保存、調査・研究、展示、教育・学習、情報、社会活動、そして運営）をする。
- (8) それぞれの活動は相互に関連し包括的である。
- (9) どの段階・どのカテゴリーにもリーダーがあり、その下で主として学芸員が活動する。
- (10) スタイルは確かな基本の下、ゆるい仕組みで自由であり、ゆらぎをもっていて利用者にとって楽しい。
- (11) 高い社会性を持ち、市民と協働して活動する。
- (12) 市民は博物館活動に参加し、「見て・楽しむ、学んで・わかる、考える」ことを行う。

- (13) 五官で感じる博物館である。
- (14) 包括的博物館は進化する。
- (15) 包括的博物館はひとつの博物館（単科から複合・総合）に始まり博物館群につながる。地域から地方・国・世界へ及ぶミュージアムネットである。
- (16) 「自然と人」が大テーマである。
- (17) エコミュージアムまたは「えこ」ミュージアムは包括的博物館のひとつである。
- (18) 新博物館学を構築する。他分野をモデルに実際から理論へ発展させる。

4) 包括的博物館とは

- (1) 基本的な博物館活動をする博物館である。
- (2) ある形の包括的活動をする博物館である。
- (3) さまざまな博物館活動を結び・まとめ・包み、包括的にする博物館である。
- (4) 他館・他機関・市民と協働する博物館である。
- (5) 未来を展望し、外へ開かれた博物館である。
- (6) 言葉で表せば「立体的ネットワーク博物館」である。
- (7) 図28(1)・(2)はイメージを図で表わしたものである。

5) 21世紀の博物館、キャッチコピー

本題と直接的に関連することではないが、21世紀の博物館のあり方を現代的な表現（キャッチコピー）を使って表わして見る。

- ・楽物館から学物館へ、そして創考館へ。
- ・博物館で、見る・楽しむ、学ぶ、そして考える。
- ・博物館、みんながオーナー、そして学芸員。
- ・博物館は文化の泉。
- ・博物館、地域のつくるホームページ。
- ・知識のコンビニー博物館。
- ・博物館を日常生活に。

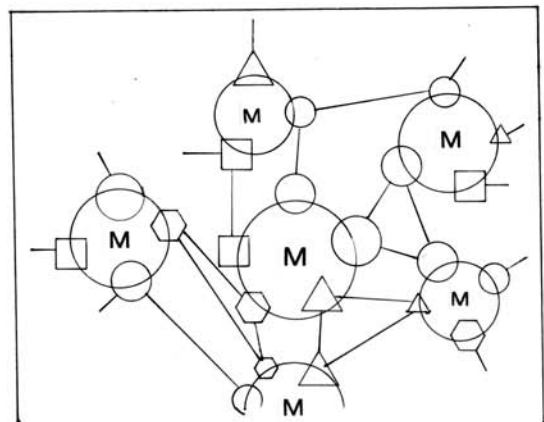
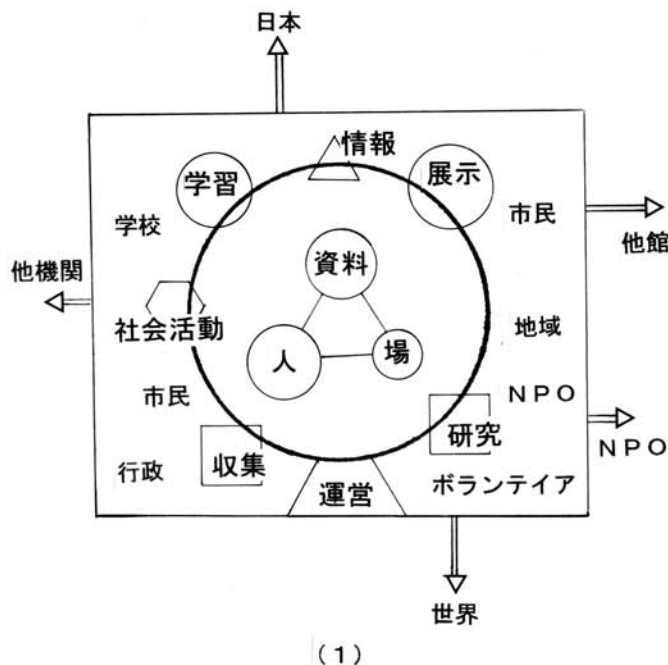


図28. 包括的博物館のイメージ(1), (2).

Fig. 28. Image of the "Comprehensive Museum" (1), (2).

- ・ハンズオンから歴史観・自然観まで博物館。
- ・知のe-mailを(は)博物館へ(から)
- ・いやしの現場—博物館。
- ・環境・観光・健康は博物館で。
- ・日本中にエコミュージアムを。
- ・〇〇〇(例 大学;寺;神社;公園など)にエコミュージアムを。
- ・「もの」と「情報」の玉手箱—ミュージアム。
- ・バーチャルのディズニーランド, リアルの博物館。
- ・リアルからバーチャルまで, 博物館は情報センター。

おわりに

1972年からは始めた博物館活動は37年の年月を刻んだ。この間、さまざまな活動にたずさわって、多くの方々と交流があった。内外の多くの博物館を訪れ、展示を見、博物館づくりに力を貸し、その他の活動に参加してきた。いくつかの大学で博物館学を講義し、改めて博物館のあり方を考え、少しでも現在の博物館学を教育しようと努力した。

本来の研究分野(地質学・古生物学)と関連の深い博物館はもうひとつの活動の場を筆者に与えてくれ、特に大学を退いてからは活動の中心のひとつであった。丹青研究所での顧問としての活動は博物館への眼をさらに開かせてくれ、知識・思考を深めることに役立った。

最近での新しい発想は博物館のあり方、それは展示から始めて博物館全体に及ぶ「包括的」という考えであった。2009年には「包括的展示論」、「えこ」ミュージアム論」をまとめた。

それらを含め、発展させてまとめたのが本論である。考えが完全な形でまとまっていない部分、難解な部分もあり、十分ではないが提示してご批判を仰ぐこととした。困難な時代を予想させる21世紀において、博物館界に少しでも貢献できることになれば幸いである。

引用文献

- 網干善教(編著)(1998), 博物館学概説. 338 p. 関西大学出版部。
 網干善教・小川光陽・平 祐史(編著)(1995), 博物館概説. 319 p. 佛教大学通信教育部。
 Ambrose, T. and C. Paine (1993), Museum Basics. (日本博物館協会(訳)(1995), 博物館の基本. 292 p. 日本博物館協会.)
 American Association of Museums (ed.) (1991), The Official Museum Directory. 1351 p. The American Association of Museum, Directory Division.
 青木 豊(2009), 新井重三先生(1920～2004)の博物館学思想. 明治大学学芸員養成課程紀要, no. 210, 1-7.
 新井重三(1979), 博物館学(理論)と博物館実践学. 3-32. 新井重三(編著)博物館学講座 第1巻 博物館学総論, 279 p.
 Bartz, B. et al. (ed.) (1992), Museums of the World. 4th ed. 642 p. K. G. Saur.
 琵琶湖博物館うおの会(編)(2005), みんなで楽しんだうおの会—身近な環境の魚たち—. 琵琶湖博物館研究調査報告, no. 23, 233 p. 滋賀県立琵琶湖博物館。
 琵琶湖博物館・滋賀県博物館ネットワーク協議会(編)(2000), 博物館を評価する視点. 琵琶湖博物館研究調査報告, no. 17, 209 p. 滋賀県立琵琶湖博物館。
 千葉県立中央博物館(編)(2009), 自然史系博物館のこれから! 千葉

- 県立中央博物館開館20周年記念シンポジウム要旨集, 20 p.
 千地万造(1998), 自然史博物館. 253 p. 八坂書房。
 Editorial Board (ed.) (1975), Museums of the World. 2nd ed. 808 p. Verlag Dokumentation.
 榎本 徹(2008), 博物館法改正とこれからの博物館. 岐阜の博物館, no. 157, 1.
 藤 泉(2008), 長崎美術館・長崎歴史文化博物館における県(設置者)の果たす役割. 博物館研究, 43(8), 12-15.
 富士川金二(1971), 博物館学. 279 p. 成文堂。
 博物館基準研究会(1999), 博物館の基準をめぐる考察—イギリス, アメリカの取り組みから—。博物館研究, 34(9), 12-16.
 原子 禪・亀畑清隆(2006), 旭山動物園のつくり方. 239p. 文芸春秋。
 広瀬 鎮(1992), 博物館社会教育論. 226 p. 学文社。
 本会調査部(1941), 大学専門学校と博物館. 博物館研究, 14(7), 5-7.
 一記者(1929), 博物館の組合せ陳列法. 博物館研究, 2(6), 1-4.
 一記者(1929), 大学教育に於ける博物館の位置. 博物館研究, 2(8), 1-5.
 一記者(1929), 博物館の種類及び其の定義. 博物館研究, 2(11), 1-3.
 五十嵐耕一(2005), 指定管理者制度について. 博物館研究, 40(8), 6-9.
 伊藤寿朗(1978), 博物館の概念. 伊藤寿朗・森田恒之(編)博物館概論. 学苑社, 3-43.
 伊藤寿朗(1991), ひらけ博物館. 62 p. 岩波書店。
 伊藤寿朗・森田恒之(編著)(1978), 博物館概論. 503 p. 学苑社。
 糸魚川淳二(1979), 博物館だより. 220 p. 共立出版。
 糸魚川淳二(1982), 博物館を考える. 194 p. 共立出版。
 糸魚川淳二(1993), 日本の自然史博物館. 228 p. 東大出版会。
 糸魚川淳二(1999), 新しい自然史博物館. 229 p. 東大出版会。
 糸魚川淳二(2009a), 日本の自然史博物館の現在(2008). 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 1-12.
 糸魚川淳二(2009b), 包括的展示論. 瑞浪市化石博物館研究報告, 35 (Supplement), 37-51.
 糸魚川淳二(2009c), 自然史博物館から「えこ」ミュージアムへ. 瑞浪市自然史博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 83-92.
 亀井明德(1989), わが国の主な大学博物館. 文明のクロスロード Museum Kyushu, 8(3), 43-47.
 可児光生(2009), 美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動—子どもの学びと地域博物館—. 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 62-72.
 加藤有次(1977), 博物館学序論. 253 p. 雄山閣出版。
 加藤有次(1996), 博物館学総論. 378 p. 雄山閣出版。
 加藤有次(1990), 「博物館学」の語源. 加藤有次・椎名卓仙(編著), 博物館ハンドブック, 雄山閣出版, 12-13.
 加藤有次(2000), 博物館学総論. 3-26. 加藤有次(編著)新版博物館学講座 第1巻 博物館学概論. 257 p. 雄山閣出版。
 加藤有次・椎名卓仙(編)(1990), 博物館ハンドブック. 337 p. 雄山閣出版。
 小宮正安(2007), 愉悅の蒐集 ウンダーカンマーの謎. 222 p. 集英社。
 小宮正夫(2006), <旭山動物園>革命—夢を実現した復活プロジェクト—. 188 p. 角川書店。
 久保禎子・宮下十有(2006), 地域博物館における普及活動のこれまでとこれから—学校教育との連携から学んだこれからの博物館—. ミュージアム・データ, no. 71, 1-6.
 倉田公裕(1979), 博物館学. 280 p. 東京堂出版。
 倉田公裕(2009), 20世紀の博物館学研究者からのメッセージ—その反省と期待—. 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 93-97.
 倉田公裕・矢島国雄(1997), 新編博物館学. 408 p. 東京堂出版。
 栗原裕司(2001), 国立博物館, 美術館等の中期目標, 中期計画等について—独立行政法人評価委員会における審議経過—. 博物館研究, 36(6), 22-34.
 Lovric, M. (2007), The World's Most Unusual Museums. (安原和見(訳)

- (2009), 世界の奇妙な博物館. 361 p. 筑摩書房.
- 前沢和之 (2006), 指定管理者制度導入のパラドックス. ミュージアム・データ, no. 71, 9-10.
- 松岡敬二 (2008), 展示改装に導入した「複合交差型展示」. 展示学, no. 46, 32-33.
- 蓑 豊 (2007), 超・美術館革命—金沢 21 世紀美術館の挑戦. 195 p. 角川書店.
- 水藤 真 (2003), 博物館を考える III. 204 p. 山川出版社.
- 守井典子 (2003), アメリカ博物館協会が考える博物館の基準と評価—キム・アイゴー副会長の講演から—. 博物館研究, **38**(5), 9-11.
- 森本直知 (2005), 指定管理者制度に思う—島根県立三瓶自然館の場合—. 博物館研究, **40**(11), 8-9.
- 諸岡博熊 (1995), 企業博物館. 272+22 p. 東京堂出版.
- 中川成夫 (1988), 博物館学論考. 252 p. 雄山閣出版.
- 中根孝司 (2000a, b), 国立博物館に係る独立行政法人制度の解説 (1), (2). 博物館研究, **35**(8), 11-21; **35**(9), 10-15.
- ノイマン・ナタリー・川嶋・ベルトラン敦子 (2002), 博物館の自己点検—ドイツとフランスにおける評価の動向から—. 文環研レポート, no. 19, 6-12.
- 南山大学大学院人間文化研究科 (編) (2006), 強い博物館像を求めて—博物館はどうなる—. シンポジウム記録集, 28 p.
- 日本博物館協会 (編) (1956), 博物館学入門. 248+24 p.
- 日本博物館協会 (編) (1978), 全国博物館総覧 上・下. 666+564+46 p. ぎょうせい.
- 日本博物館協会 (編) (2005), 博物館総合調査報告書. 274 p. 日本博物館協会.
- 日本博物館協会 (編) (2009a), 博物館評価制度等の構築に関する調査研究報告書. 235 p. 日本博物館協会.
- 日本博物館協会 (編) (2009b), 平成 19 年度博物館園数. 博物館研究, **44**(4), 5-8.
- 日本博物館協会 (編) (2009c), 平成 19 年度博物館入館者数. 博物館研究, **44**(4), 9-11.
- 西野嘉章 (1995), 博物館学. 203+iv p. 東大出版会.
- 西野嘉章 (1996), 大学博物館. 224 p. 東大出版会.
- 西野嘉章 (2000), 「展示評価について」. 琵琶湖博物館研究調査報告, no. 20, 143-144.
- 西野嘉章 (2001), ポスト独法化時代—「百策連環」の必要と「原点回帰」について. 全科協ニュース, **31**(2), 1-2.
- 西野嘉章 (2008), 「鳥のビオソフィア」展と『鳥学大全』. UP, no. 426, 12-16.
- 西山健一 (2004), 豊橋市自然史博物館・古生代展示室リニューアル. 展示学, no. 38, 74.
- 布谷知夫 (2005), 博物館の理念と運営. 234 p. 雄山閣.
- 荻野義雄 (2009), 中津川市鉱物博物館と長島鉱物コレクション. 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 25-35.
- 大堀 哲 (編著) (1997), 日本博物館総覧. 387 p. 東京堂出版.
- 大堀 哲 (編著) (1997), 博物館学教程. 344 p. 東京堂出版.
- 大木公彦 (2008), 古生物学のアウトリーチとフィールドミュージアムの構築—鹿児島大学総合研究博物館の活動を例にして. 化石, no. 83, 30-40.
- 大塚和義 (編) (1990), 博物館学 I—博物館の現在—. 174 p. 放送大学教育振興会.
- 大塚和義・矢島国雄 (編著) (1991), 博物館学 II—博物館の仕事—. 189 p. 放送大学教育振興会.
- 佐久間 豊 (2009), パネルディスカッション「指定管理者制度」部会報告. 博物館研究, **44**(3), 12-15.
- 里見親幸 (2009a), いかに生きるか—人文系博物館 (2008), 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 13-19.
- 里見親幸 (2009b), 世界と日本のエコミュージアム (2008), 瑞浪市化石博物館研究報告, no. 35 (Supplement), 73-81.
- 篠 雅廣 (2008), 指定管理者制度における設置者責任. 博物館研究, **43**(8), 4-5.
- 関 秀夫 (1995), 日本博物館学入門. 295 p. 雄山閣出版.
- 高橋信裕 (2009a), 公立博物館運営の新たな選択肢—「地方独立行政法人化」への取り組みと背景—. 文環研レポート, no. 27, 1-8.
- 高橋信裕 (2009b), 第三者的な立場から博物館を評価し, 格付けする試み. 文環研レポート, no. 28, 1-5.
- 棚橋源太郎 (1950), 博物館学綱要. 319 p. 理想社.
- 丹青総合研究所 (編) (1986), 博物館・情報検索事典. 544 p. 丹青社.
- 丹青研究所 (2001), 「博物館の評価について」アンケート調査結果報告. ミュージアム・データ, no. 54, 8-9.
- 寺西貞弘 (2005), 指定管理者制度と公立博物館. 博物館研究, **40**(8), 16-18.
- 鶴田総一郎 (1956), 博物館学総論. 日本博物館協会 (編), 博物館学入門, 理想社, 9-122.
- 上田 篤 (1989), 博物館からミュージランドへ. 223 p. 学芸出版社.
- 牛島 薫 (2002), 日本における博物館の評価の概観. 全科協ニュース, **31**(6), 1-3.
- 梅棹忠夫 (1975), 民族学博物館. 298 p. 講談社.
- 瓜生由紀 (2003), 福井県立博物館のリニューアル—福井県立博物館から福井県立歴史博物館へ—. 博物館研究, **38**(7), 8-9.
- 矢島国雄 (2009), 棚橋源太郎とその博物館学 (1). 明治大学学芸員養成課程紀要. no. 20, 21-32.
- 山本紀一 (2005), 北九州市立小倉城庭園の指定管理者制度. 博物館研究, **40**(10), 10-11.
- 雪山行二 (2007), 指定管理者制度の現在 横浜美術館からの報告. JAAM ニュース, no. 96, 22.
- 全国科学博物館協議会 (2000), 博物館の食堂. 全科協ニュース, **30**(2), 1-5.
- 全日本博物館学会 (2004), 全日本博物館学会三十年のあゆみ. 521 p. 全日本博物館学会.

2009 年 10 月 31 日原稿受理